
艦魂年代史外伝 ～巡洋艦奮闘記 ソロモンの海に流れる血と涙～

黒鉄大和

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

艦魂年代史外伝 〱巡洋艦奮闘記 ソロモンの海に流れる血と涙〱

【Nコード】

N2598N

【作者名】

黒鉄大和

【あらすじ】

破竹の勢いで進撃を続けていた日本海軍。だがその快進撃はミッドウェー海戦の敗北による世界最強と謳われていた機動部隊の損失によって止まる事となった。失われた機動部隊を補う為に日本軍はガダルカナル島に飛行場の建設を開始した。だが飛行場を建設中のガダルカナル島に突如連合軍が上陸を開始。日本海軍は飛行場及び同島の死守の為に新設したばかりの第八艦隊による夜間突撃作戦を敢行。後に第一次ソロモン海戦と呼ばれる日本海軍の夜戦での大勝利。これはその影で戦い抜いた八人の戦姫の奮闘と、様々な形での

信頼の絆を描いた物語である。

第一話 輕巡と重巡 消えない壁を隔てて（前書き）

どうも、こちらではお久しぶりです。一応分類上はギリギリ艦魂作者の黒鉄です。

実に１年半ぶりの艦魂短編作品。本当に久しぶり過ぎて書き方を若干忘れていた状況です（苦笑）

今回の舞台はこれを読んでいる人は当然知っているはずの名海戦、第一次ソロモン海戦。日本海軍伝統の夜戦において第八艦隊が見事敵艦隊を粉砕して大勝利した戦い。

そんな第一次ソロモン海戦を舞台に、様々な巡洋艦の艦魂達が織り成す物語と激しい戦いの中での少女達の想い。

かなり久しぶりの艦魂作品なので、皆さん温かい目で見守ってください。

それでは、どうぞッ！

第一話 軽巡と重巡 消えない壁を隔てて

一九四二年六月、日本海軍はミッドウェー諸島攻略及び迎撃して来るであろう敵機動部隊殲滅の為にミッドウェー作戦を発動。真珠湾以来連戦連勝、世界最強艦隊と謳われた日本機動部隊も珊瑚海戦の影響で不参加の空母『翔鶴』^{しょうかく}『瑞鶴』^{すいかく}を除いた『赤城』^{あかぎ}『加賀』^{かが}『蒼龍』^{そうりゅう}『飛龍』^{ひりゅう}の四空母を率いて作戦の主力として参加。さらに戦艦『大和』^{やまと}以下の連合艦隊のほぼ全戦力が投入されたこの作戦は、まさに日本海軍の存亡を懸けた一大決戦であった。

しかし、事前に日本側の暗号を解読し万全の迎撃体制を整えていた米軍は基地の対空兵器の増設と航空隊の増援、さらに機動部隊を進出させていた。

日本艦隊はそんな米軍の反撃に遭い、さらに米機動部隊に先手を打たれ、『赤城』『加賀』『蒼龍』を失った。残った『飛龍』は味方の仇を討つ為に猛反撃。空母『ヨークタウン』を戦闘不能にした（その後潜水艦『伊-一六八』の攻撃で沈没）。しかしその『飛龍』も敵機動部隊の反撃に遭い、沈没。

世界最強と謳われた日本機動部隊は、事実上壊滅した。

機動部隊を失った連合艦隊は作戦を中止。撤退を余儀なくされてしまった。

このミッドウェー海戦の大敗北は日米の攻守を逆転させる重要な戦いであった。

機動部隊が壊滅した日本海軍は、新たな空母の増産及び、既存空母の改良強化、さらに空母兵力が整うまでの間、南太平洋の制空権確保の為に基地航空隊の状況を行った。その一つが、ガダルカナル飛行場の建設であった。

当時日本海軍はFS作戦というフィジー、サモアを占領して南太平洋の制海空権を確保し、アメリカとオーストラリアのシーレーンを分断。オーストラリアをイギリスから奪い取るという作戦を考え

ていた。その為に日本軍はラバウルとツラギを確保し、徐々に勢力を南下させていた。

しかしその前段階の作戦であるポートモレスビー攻略の為にMO作戦は攻略部隊が珊瑚海において米機動部隊の反撃に遭い、なんとか戦術的な勝利を得るも本来の攻略作戦は失敗に終わっていた。

さらにミッドウェー海戦によって作戦に参加する予定だった機動部隊が壊滅し、作戦は二ヶ月延長される事となった。

その間、日本海軍はルンガ島に飛行場を建設して失われた機動部隊を補うが、質量共に機動部隊にははるかに劣っていた。

一方米軍側もそんな日本軍の動きを見てオーストラリア防衛、ソロモン諸島の奪還、日本軍の南下阻止、戦争における主導権の奪還などを目的にウォッチタワー作戦を発動。日本軍がさらに南下する為に建設しているガダルカナル島の飛行場確保及び同島の占領。南太平洋における防衛線を築く為に七月上旬、上陸部隊を満載した攻略部隊、及びその護衛の為に艦隊などを出撃させ、フィジー諸島に集結させた。

八月七日早朝、米軍はツラギ及びガダルカナル島に奇襲上陸を決定した。ツラギに上陸した米軍兵力は約三〇〇〇人。それに対し日本軍は水上偵察機部隊の搭乗員や整備兵を加えても四〇〇人にも見えないものであった。数日後、守備隊は玉砕した。

その頃ガダルカナル島にも総兵力一万を超える上陸部隊が護衛艦隊の援護砲撃を受けながら上陸していた。

当時日本軍は米軍の反撃は一九四三年以降を想定していた為、その兵力は最低限な飛行場設営部隊が二五七一人、正規守備隊は六〇〇人という小規模なものであった。

日本軍はその圧倒的な戦力に対抗する事もできずにジャングルに後退する事となった。

この攻略部隊に対しラバウル航空隊はすぐさま迎撃部隊を発進させるが、敵艦隊には空母が随伴しておりそこから出撃して来る迎撃戦闘機に阻まれ、戦果を挙げるところか逆に出撃した機ほとんど

が撃墜されるという結果に終わってしまった。

この米軍の思わぬ反撃に日本海軍司令部は慌てたが、すぐに南太平洋防衛艦隊である第八艦隊司令部に反撃作戦の立案及び実行を命じた。この艦隊はミッドウェー海戦の敗北に伴って新設された新しい艦隊であった。

第八艦隊司令部は今回の米軍の上陸は威力偵察（本格的な攻撃ではなく、小規模な部隊をぶつけて敵兵力や反撃作戦などの敵情を知る偵察の事）と考えていた。さらにツラギの守備隊が命懸けで送った敵兵力の情報によると敵は空母一隻を主軸とした小規模な護衛部隊であった（実際は空母三隻、戦艦一隻を主軸とした大攻略部隊であった）。その為、敵機動部隊は基地航空隊で叩き、既存の第八艦隊を夜間に殴り込みさせて残存敵護衛艦隊を撃滅しながら進撃。敵輸送船団を壊滅させ、さらに可能であれば上陸部隊をも砲撃。その後、一個大隊規模を逆上陸させれば十分奪還可能と判断した。

第八艦隊司令長官、三川軍一中将は自らその殴り込み艦隊を指揮し、旗艦重巡洋艦『鳥海』及び迎撃部隊としてラバウルに向かった。後藤存知少将率いる第六戦隊（重巡洋艦『古鷹』、『加古』、『青葉』、『衣笠』）の計重巡五隻で出撃を決定した。

しかしここへ作戦参加を志願する部隊が現れた。第十八戦隊（軽巡洋艦『天龍』、『夕張』）と第二九駆逐隊（駆逐艦『夕風』）である。この両部隊は旧式艦で編成されていた上に錬度が低く、優れた技術が必要とする夜戦には不向きであった。最初は断っていたのだが、諦めきれない第十八戦隊司令部の必死の懇願に三川中将が根負けし、急遽この三隻が新たに部隊に加わる事となった。ただし、夜戦の邪魔にならない程度に後方に配置される事となった。

かくして第八艦隊、重巡洋艦五隻、軽巡洋艦二隻、駆逐艦一隻の突撃艦隊が編制され、ガダルカナル島防衛の為に出撃した。

ガダルカナル島に上陸している敵を撃退する為に第八艦隊は青空の下、敵潜水艦や敵艦、敵機を警戒しながら進撃していた。

旗艦『鳥海』を囲むように『古鷹』『加古』『青葉』『衣笠』『天龍』『夕張』『夕風』が輪型陣形を組む。その中の一隻、『鳥海』の一室は現在第八艦隊艦魂司令部が置かれている。そこに数人の艦魂がいるのだが・・・

「だから、先輩達は作戦のお荷物だつて言ってるの。そんな事わからないほど愚かなのかしら？」

そう言ったのはさらりと伸ばした黒髪が美しい、細メガネを掛けた知的な印象を持つ女性。だがその美しい顔に彼女は今日の前の常識知らずなバカ達をけなすような笑みを浮かべていた。彼女の名は加古。重巡洋艦『加古』の艦魂だ。

「私はただ、あんた達が心配で駆け付けたのよッ！」

そう叫ぶのは長い黒髪を清潔そうな真つ白なリボンでポニーテールに結った女性。急遽作戦に参加する事になった軽巡洋艦『天龍』の艦魂だ。

そんな天龍に向かって、加古はわざとらしく大きなため息を吐いた。

「まったく、これだから能無しな軽巡は困るわね。いつまでも若い子ぶってんじゃないわよ。あんたなんて戦時じゃなきゃとつくの昔に引退している身じゃない。作戦に参加できただけでもありがたいつてのに、この私に意見するなんて身の程をわきまえてはどうかしら、先輩？」

「話にならないッ！ あんたなんか用はないわッ！ 鳥海か古鷹を呼びなさい！」

「あなた自分の立場つてのわかつてるの？ いくら先輩だからって重巡と軽巡じゃ同じ下士官でも一等兵曹と二等兵曹の違いくらいあるのよ？ それに私はこの作戦の要の一人。いわゆる幹部つてやつね。そんな私に対して無礼な言動を吐くなんて、そんなに首を飛ばされたいのかしら？ うん？ どうかのかしら？」

人をバカにしたような笑顔を浮かべて首を何度も傾げる加古。そんな彼女の態度に天龍は激怒する。

確かに『加古』と『天龍』とでは『天龍』の方が七年も年上だ。なので加古は天龍にとっては後輩になるのだが、二人の間には同じ巡洋艦でも《重》と《軽》という壁がある。日本海軍では重巡洋艦の方が立場的に上に当たる。つまり、加古は天龍の後輩でもあるが同時に上官でもあるのだ。

「この作戦はすごく重要なのは、あなたの中古品な頭でもわかるでしょ？ うん？ なのに、あんた達みたいなお荷物がいたんじゃ、きつとこの作戦は失敗するでしょうね。お国の命運がかかってるのに。どうしましょう？」

「失敗などしないわよ！ 私達は私達なりに全力で戦うわ！」

「あら？ 自己満足ってやつ？ 怖い怖い。自分の満足の為に艦隊全て、そしてお国を危険に晒すなんて軍人失格ね」

「き、貴様……ッ！」

「あら？ やるって言うの？ おばさん」

一触即発な雰囲気の中、今まで天龍に命令されて黙っていた少女が二人の間に入った。

「やめぬか天龍ッ！ 加古も天龍に悪口を言うのはやめるのじゃ！これから作戦があるんじゃぞ？ こんなところでケンカしてどうするんじゃ！」

「放せッ！ 奴とは一度剣を交えなければ気が済まんッ！」

「やめるのじゃッ！」

特徴的な口調で刀を抜こうとした天龍を止めたのは肩に柔らかく掛かるようなセミロングとかわいらしいおさげ、そしてアホ毛と特徴満載な髪形に細メガネをした少女。彼女の名は夕張。軽巡洋艦『夕張』の艦魂だ。

「放せッ！」

「落ち着くのじゃッ！ 今は争ってる場合ではない！ そうじゃろ！？」

夕張の必死な言葉に天龍もようやく冷静さを取り戻したのか暴れるのを止めた。抜き掛けた刀を鞘に納め、改めて夕張に礼を言う。

「ありがとう夕張。少し熱くなり過ぎたみたいね」

「礼など不要じゃ。ワシと天龍の仲じゃろ？」

そう言って屈託のない笑みを浮かべる夕張。だが、そんな彼女すらも加古は冷めた目線で見詰める。

「前々から思ってたけど、あんたの口調ってかなりキモイんだけど」
「き、貴様ッ！」

「やめろ天龍ッ！　ワシは気にしておらん！」

必死になって天龍の暴走を止めようとする夕張。そんな彼女を見て加古はめんどくさそうな表情を浮かべる。

「あーあ、軽い頭の巡洋艦と話していると疲れるわ。さっさと出て行ってくれないかしら？」

二人に興味がなくなっただのか、加古は天龍達が部屋に入ってくる前までしていた爪の手入れを再開する。だが、天龍は引かない。

「貴様などに最初から用はないッ！　古鷹か鳥海を出しなさいッ！」

「だあかあら、二人は今視察で出かけてるって言ってるじゃない。バカなんじゃないのあんた？　あ、バカだっけ？」

「ならその場所を教えなさいッ！」

「艦隊司令長官の居場所なんて極秘事項よ？　私が知る訳ないじゃない。バカはこれだから困るわね」

「自分の上官の居場所もわからないなんて、あんたのいい加減さにも呆れるわ！」

「はいはい。バカはいくらでも吠えてなさい」

そう言ってシッシツとまるで虫でも追い払うかのように二人に手を振る加古。そんな彼女の態度に天龍が激怒するも、夕張が必死になって止める。

「良いから、わからんならワシらで探せばいいのじゃ。行くぞ」

「……チッ、仕方ないわね。行くわよ夕張、夕風」

そう言って天龍はずっと自分達の怒鳴り合いにその身を小さくしていたおさげがかわいらしい少女、駆逐艦『夕風』の艦魂の手を引く。

「あ、はい」

「ちよつと夕凧」

出て行こうとした三人のうち、夕凧だけに加古は声を掛けた。

「今日の夜私の部屋に來ない？　かわいがってあげるわよ」

そう言ってからかうような笑みを浮かべる加古。その言葉に夕凧は顔を真っ赤にして天龍の陰に隠れ、天龍はキツと加古を睨みドアを荒々しく開けて出ていく。夕張は最後に天龍がブチ開けたドアをきれいに閉めて二人を追う。

三人のいなくなった司令部から、加古の笑い声が聞こえ、天龍は悔しそうに唇を噛んだ。

大股で早足気味で歩く天龍はしばし無言だったが、突然壁をガンツと蹴った。その激しい音に夕凧がビクツと震える。

「あのクソ忌々しい加古ッ！　あんなのと一緒に作戦をしなきゃいけないって言うのッ！？」

怒り心頭。激怒する天龍は何度も何度も執拗に壁を激しく蹴る。その音に毎回毎回「ゴ丁寧にビクツと震える夕凧の頭をポンポンと夕張が撫でる。

「気にするな天龍。加古の嫌味や極悪な態度は今に始まった事じゃないじゃろ？　いちいち気にせんのじゃ」

「でも悔しいじゃないッ！」

「気持ちハワシもわかる。悔しいのはワシも同じじゃ。じゃが

夕凧が泣いてしまうし、何より本人の目の前じゃ蹴らん方がいいぞ？」

その意味深な言葉にハツとなる天龍。慌てて振り返るとそこにはボブカットがかわいらしい小柄な少女が立っていた。その下には持っていたであろう書類が見事に散らばっている。

「て、天龍さん？　私、何かあなたを怒らせるような事しましたか？」

今にも泣き出しそうな彼女こそ、この第八艦隊旗艦、重巡洋艦『鳥海』の艦魂だ。天龍は彼女を見てサーツと顔を青ざめる。

「い、いや、違うッ！ これには深い訳があつて……ッ！」

あわあわと大慌てする天龍。そんな彼女に夕張は小さくため息すると口下手な彼女に代って鳥海の誤解を解いた。

「つてな訳で天龍はブチギレてたんや。驚かせてごめんなあ」

「そ、そうだったんですか。それはひどいですね加古さん」

鳥海は天龍に同情する。同情される天龍は鳥海に何度も謝りながら彼女が落としてしまった書類を拾い集めている。

「加古さんの態度の悪さ、どうにかならないものでしょうか？」

「ならないわね。あのバ加古は」

「そう、ですね」

苦笑いしながら鳥海も自らが落としてしまった書類を拾い集める。ふと天龍は床に落ちている書類の一つに目を落とした。それは現在わかる敵の戦力が書かれている。その戦力差は圧倒的に自分達が不利であった。特に目立つのは敵空母の存在だ。

「敵に空母がいるのは辛いわね。それを抜いてもこちらが圧倒的に不利だつていうのに」

「だからこそその日本海軍伝統の夜戦で戦うのです。その為にも、天龍さんや夕張さんの力が必要なんです」

そう力強く言う鳥海に、天龍は小さく苦笑した。

「だが、私達は第八艦隊の司令部からも荷物扱いされてるのよ？ 今回の作戦だつて後方に配置されてるし、正直役に立つかどうか」

「何言つておるのじゃ。お主加古に言つたじゃろ？」「私達は私達なりに全力で戦うわ！」つと。言つたのならそれを突き通すまでじゃ」

そう言つて屈託のない笑みを浮かべる夕張。そんな彼女に天龍は心の中で感謝して笑みを浮かべた。だが、結構素直じゃない天龍はわざと彼女をからかうような事を言う。

「まったく、彼氏がいる人は心も強いわね」

その途端夕張の顔が真っ赤に染まる。そんな彼女の反応を見て天

龍はイタズラっぽい笑みを浮かべる。

「私も彼氏ができれば、あなたみたいに強くなれるのかしら？」

「べ、別にワシと奴は彼氏ではないッ！ 何度言えばわかるのじゃッ！」

「ええ、だっていつも仲良く一緒じゃない」

「そ、それは……ッ！」

顔を真っ赤にしたまま右往左往して慌てまくる夕張。それを見て天龍はおかしそうに笑う。そんな二人を見て、根っからのメモツ子である鳥海は早速メモ張を取り出してメモする。

「《夕張さんは彼氏持ち》っと……」

「じゃから違うと言っておろうがッ！」

「ムキになっちゃって。それじゃ認めてるのと変わらないじゃない」「お、お主ら……ッ！」

腰の刀に手を伸ばす夕張に、天龍はやり過ぎたとやっと理解。先程までの楽しそうな笑顔が一転して引きつった笑みに変わる。鳥海は鳥海で「《何事も引き際が肝心》っと……」とこの場には見事命中している名言をメモに書き込んでいる。すっかり影が薄くなっている夕風はどうしようかとおろおろする。と、そこへ……

「あらあら。もう、ケンカはダメよお」

緊迫感全開なこの場にはあまりに外れまくっているのんびりとした柔らかな声に四人は一斉に振り向いた。するとそこには優雅に巫女服を着こなした大和撫子という言葉が見事な笑顔が素敵な美女が立っていた。ただし、胸の部分がやけに膨らんで見える。

「何じゃ、衣笠か」

「夕張ちゃんも天龍ちゃんもケンカはメツ。あなた達のかわいい顔に傷が付いちゃったら、お姉さん泣いちゃうわよ」

そう言っただけにも泣き出しそうな表情を浮かべる、見ての通りほんわかした雰囲気身を纏った癒し系お姉さんキャラな彼女は重巡洋艦『衣笠』の艦魂。皆から姉と慕われる彼女は巡洋艦や駆逐艦などに絶大な影響力を有している人物だ。

一人称は《お姉さん》。本当なら年上である夕張や天龍でさえも妹扱いしている変わり者。だが指揮官としての指揮能力も参謀としての作戦立案能力にも長け、何より数の多い巡洋艦や駆逐艦の艦魂達に絶大な影響力を有する彼女は実は日本海軍で最も戦力を有する艦魂だつたりする。日本海軍世界においてお姉さんキャラが最強と言われる所以は長門ゆえんや衣笠ながとなどが原因だ。

そんな最強の艦魂の一人とも謳われる衣笠だが、普段はそんな雰囲気はまるでない上に、かなりの天然キャラだつたりする。

「衣笠。お主には関係ないんじゃない？」

「関係なくなんかないわよ。お姉さん、夕張ちゃんや天龍ちゃんがケンカするの見てられないわよ。シクシク」

「なら見なければいいじゃろうが」

「うえゝん。夕張ちゃんがいじめるゝ」

その場にうずくまってえんえんと泣き出してしまふ衣笠。傍にいた鳥海と夕凧が慌てて彼女に駆け寄る。

「だ、大丈夫ですか？」

「夕張さん！ 衣笠さんを泣かせないでくださいッ！」

「ワシかッ！？ ワシが悪いのかッ！？」

泣き崩れる衣笠をかばいながら非難の声を上げる鳥海。そんな彼女の言葉に夕張はなぜか自分がものすごく悪役に思えてくる。別に彼女は何も悪くはないのだが。

「わ、わかったッ！ もうケンカなどせぬから泣き止めッ！」

「あら、良かった良かったゝ」

途端にケロッとコロコロしたような笑顔を浮かべる衣笠。それを見てものすごい疲労感が夕張の肩にのしかかった。

「お、お主という奴は……」

呆れまくる夕張に柔らかな笑みを向け、衣笠は振り返る。するとそこにはメモを構えた鳥海が自分を見ていた。

「なあに鳥海ちゃん。お姉さんに質問ゝ？」

「い、いえ。ただよくあの夕張さんを止められたなあって思ってた」

「あらあゝ、簡単よゝ。それに今でもダメだったら、私の柔らかいお胸さんで夕張ちゃんを包んであげれば即問題解決よゝ」

「そ、それはどういう理由なのですか？」

「愛情よ愛情。夕張ちゃんとは一緒にお風呂にも入った仲だし」

「うおいッ！ 一体何十年前の話じゃッ！ もうそのような事はしておらんじゃろッ！」

今度は別の理由で顔を真っ赤にして怒鳴る夕張。だが衣笠はそんな夕張の怒号に再び涙を浮かべる。

「そうなのよねゝ、夕張ちゃんもうお姉さんとお風呂に入ってくれないの。お姉さん悲しいわゝ。シクシク」

「当たり前じゃッ！ もうそんな年ではないし、そもそもお主と共に風呂になど入ったら貞操の危機であろうがッ！」

夕張の鋭いツツコミに、天龍と鳥海は何度もうなずいた。

「確かに、衣笠は危険思考の持ち主だものね。近づくな危険ってね」「同性愛者って奴ですか？」

二人の言葉に泣いていた衣笠は突如ムツとしたような顔になる。本当に表情豊かな人だ。

「お姉さん同性愛者なんかじゃないわよゝ。男の人だってもちろん好きよゝ？ お姉さんはね、性別とか関係なくかわいいものが好きただけよゝ」

「普段のお主の行動や言動を見る限り、説得力がないのお。突然後ろから抱きついて来て胸を揉み始めるし」

「私なんか昔、怪我した時に衣笠に怪我を見せたら「消毒しなくちゃねゝ」って言って傷口をなめられたわよ」

「私も、以前泣いている衣笠さんにハンカチを渡したら、自分のハンカチを取り出して涙を拭いたんです。使わないなら返してくださいって言ったら、「これはお姉さんの部屋に飾っておくわねゝ。どこに飾ろつかしらゝ」なんて言われてハンカチを持って行かれました」

三人は一斉に衣笠をジト目で見る。だが衣笠はプンプンという感

じで怒って反撃する。まったくもって威力のない怒りだが。

「もう、みんなひどいわぁ」

相変わらずな衣笠のセリフにため息しつつも、ふと先程まで胸に渦巻いていた加古に対する怒りが消えている事に気づいた天龍。またアホらしい事を言って夕張にツッコミを入れられて笑っている衣笠を見て、天龍は小さく苦笑を浮かべた。

「ほんと、衣笠さんには敵わないなぁ」

その笑顔の奥には、みんなを心配するお姉さんとしての一面と部下を率いる優秀な指揮官としての一面を持つ衣笠。彼女には一生敵わない、天龍は心からそう思い、同時に心から感謝した。

第一話 軽巡と重巡 消えない壁を隔てて（後書き）

第一話はとりあえず主要人物の第一弾紹介ですね。

艦魂本編でも昔は重巡洋艦と軽巡洋艦は仲が悪かったというのは書いていましたが、今回はそんな名残を残す加古と天龍の関係が主軸となりました。

この作品は現在架空戦記の部分で頓挫している新艦魂年代史が更新できない状態の為、とりあえず繋ぎとして作成した作品です。企画自体は新艦魂以前からあり、キャラの性格などもすでに決定していました。簡単に言えば新艦魂のキャラはこの作品のキャラから派生したキャラなので、似たようなキャラが多いのはその為です。

とりあえず今回はここまで。次話は明日にでも投稿します。

現在も執筆は続いており、久しぶりの艦魂作品の為苦戦中です。ですが、何とか外伝くらいはしっかり完結させたいのでがんばります。今更僕の艦魂小説なんてどうでもいいとは思いますが、どうか最後までお付き合いください。

それでは皆さん、明日もまたよろしく願います。

第二話 それぞれの真実の想い（前書き）

明日投稿とか前回言っておきながら、一日挟んですみませんでした。現在のはほぼ最終話らへんを書いているのですが、そこでちょっと煮詰まってしまう、考え込んでいる間に日付が変わってしまい、諦めてのこの時間での投稿（結局ギリギリ）

今回は艦魂年代史シリーズでは比較の出番の少ない巡洋艦の艦魂が複数登場します。

最新話、それぞれの真実の想い。どうぞ。

第二話 それぞれの真実の想い

「という事で、急遽作戦に参加する事になった天龍殿、夕張殿、夕風殿だ。皆で力を合わせて必ずや作戦を成功させるぞ」

そう言ったのは鋭い眼光に凜々しいポニータールが武士のような印象を想わせる若い女性。現役重巡洋艦最古参にして古参組の重鎮である古鷹の艦魂だ。戦艦及び全艦魂の元締めである戦艦『金剛』の艦魂とは帝国海軍発展の為に共に闘ってきた戦友にして巡洋艦のトップ。巡洋艦の艦魂からは敬意を込めて《総帥》と呼ばれている猛将だ。

この艦隊の旗艦は一応鳥海なのだが、実質指揮を執っているのは彼女だ。

そんな彼女に紹介された三人は居並ぶ重巡洋艦達に向かって見事な敬礼をして見せた。

「第十八戦隊旗艦、軽巡洋艦『天龍』及び僚艦『夕張』。第二九駆逐隊所属駆逐艦『夕風』。今回の突撃作戦に参加させていただく事になりました。皆さん、よろしくお願いします」

天龍のあいさつに、重巡洋艦達は拍手喝采で迎えた。ただし、加古は面倒そうに適当に拍手しているが。

ちなみに巡洋艦達から総帥と呼ばれている古鷹ではあるが、実はこの三人よりも年下になる。その為古鷹は年上の三人に敬意を込めて《殿》と呼んでいるのだ。軽巡洋艦に対し重巡洋艦の歴史はまだ浅い。日本海軍ではある程度軽巡洋艦を作った後に重巡洋艦を建造しているのだ、軽巡洋艦は戦中生まれのおよこ『大淀』や阿賀野型を除く全てが重巡洋艦よりも年上となる。しかし、立場的に準主力艦となる重巡洋艦の方が階級は上となっている。

「天龍さんに夕張さん、夕風さんのお力があれば鬼畜米英なんて怖くないわ。日本海軍伝統の夜戦を奴らに見せてやりましょう」

そう言って微笑んだのは長い黒髪先端を白紐で纏めた独特な形

の髪型をした少女。重巡洋艦『青葉』の艦魂、青葉であつた。ちなみに青葉は衣笠の姉になるのだが、十日しか違いはなく、容姿や性格から事実上衣笠の方が姉的立場となっている。

「さすが姉さん。私も三人と一緒にだと嬉しいわあ」

姉と話す時だけはややこしいという事で一人称を《私》に変更する衣笠は嬉しそうに微笑んだ。そんな二人を見て古鷹は「喜んでい
る場合か。これから戦だぞ」と制する。だが、その表情は少なからず緩んでいる。何しろ若い頃の古鷹は何かと軽巡洋艦最古参の天龍に世話になった経験を持つ。その為、そんな天龍と一緒に戦ができる事を心の中で喜んでい
るのだ。

急遽作戦に参加する事になった旧式艦三隻を温かく迎える第六戦隊の面々。そんな中、加古は面倒そうにあくびをしては作戦資料を読み込んでいる。元から皆の会話に参加する気がないようだ。

「もう、加古ちゃんも一緒にお話しましょうよあ」

そんな加古に背後から抱きついたのはもちろん衣笠。ちなみに古鷹の妹である加古は衣笠よりも年上だが、もちろん衣笠はそんな些細な事は気にしない。

「離しなさい衣笠。暑苦しいわ」

「もう、そんな寂しい事言わないでよあ。お姉さん泣いちゃうわよあ」

「勝手に泣いてなさい。ただし私の視界の外でお願い」

「えーん、加古ちゃんがいじめるう」

もちろんウソ泣きではあるが、まるで小さな子供のようにえぐえぐと泣く衣笠を加古はうざったそうに一瞥し、再び作戦資料を見詰める。そして苦笑している姉の古鷹を呼んで資料の一文を指差して何かを言う。

戦上手な猛将古鷹とそんな姉を参謀役として支える加古。これが古鷹姉妹のそれぞれの役目であり、今まで重巡洋艦を率いてきたやり方だ。嫌な奴という評価を受けている加古ではあるが、参謀としての能力は非常に高い。それは天龍達も重々わかっている。特に今

は戦中。個人の感情など二次三の次。優先すべきは戦争の勝利のみだ。

ウソ泣きを続ける衣笠を無視し、加古は古鷹に説明を終えると用は済んだとばかりに一人で勝手に退出した。馴れ合いを嫌う加古らしい行動だが、当然場の空気は悪いものへ変わって行く。

「……すまん。我が妹ながらどうにもわがままな奴で」

妹に代わって姉の古鷹が皆に詫びる。しかし悪いのは彼女ではないので皆頭を上げるように言ってこの場は収まる。無神経な態度をする加古に憤りを感じている天龍を、夕張が「まあまあ」となだめる。

「ともかく、我が艦隊は現在ガダルカナル島近海に集結している敵艦隊撃破の為に同海域を目指して進軍中だ。いつ敵艦隊と遭遇するかもわからない。各員いつでも戦闘開始できる状態で待機。以上解散」すでに敵地と言ってもいい海域に達している為、古鷹の表情にも緊張の色が見える。古鷹の命令に従って、各員はそれぞれの艦へと戻る。ただし、天龍と夕張はコンビで「夕張」へと向かった。ちなみに鳥海も作戦についての打ち合わせの為に古鷹と一緒に「古鷹」へと移った。

軽巡洋艦「夕張」は小型の艦体に重武装を施した実験艦であった。結果は各国を驚かせる性能を持つ強力な小型軽巡洋艦として成功した。しかし皮肉にも水上戦では強力な「夕張」であったが、時代は航空機主流へと変貌してしまった為に各艦は対空機銃や高角砲の設置を急いだが、「夕張」はその小さな艦体が仇となつてなかなか対空兵器の増設が遅れてしまっていた。

そんな数奇な巡洋艦「夕張」の甲板へと降り立った二人。すでに日は暮れて夜空にはきれいな星空がまるで宝石箱の中身を散りばめたかのように美しく輝いていた。それを見上げ、夕張は「おお、美しい夜空じゃのお」と感嘆の声を漏らす。

「そうね。やっぱり南太平洋の夜空は格別ね」

「うむ。この辺の海は翡翠色できれいじゃしの。うだるような暑さがなければ最高じゃ」

「あとスコールね。あれは勘弁願いたいわ」

「そうじゃの。スコールで体を洗おうとした兵が石鹼を使って泡塗れになった所でスコールが止んで呆然とする姿は笑いを通り越してむしろ痛々しいからの」

「それは悲惨ね」

おかしそうに笑いながら他愛のない会話する二人。昔はこういうのが日常で戦闘なんて非日常だったのに、戦中の今ではすっかり逆転してしまっている。だから、こういう平和な時間が何にも代え難い幸せなものだ。

二番砲の辺りを過ぎた頃、夜間警邏けいらをしている兵が反対方向からやって来た。その姿を見て、隣を歩いていた夕張が気づく。

「おお、北城きじょうか。夜間警邏けいらご苦労じゃ」

「夕張か。それに天龍も」

「うつす」

現れた青年に向かって労う言葉を向ける夕張と気軽にあいさつする天龍。そんな二人の言葉に「お前達もこんな時間までご苦労だな」と苦笑しながら青年は言う。

青年の名は北城優斗きじょうゆうと。この軽巡洋艦『夕張』の二番砲砲手を務める海軍少尉であり、現在この艦体で唯一艦魂が見える異能の力を持つ人間である。

所属艦である『夕張』の艦魂夕張と、同じ戦隊を組む天龍、現在ここにはいないが天龍の妹の『龍田たつた』の三人とは以前から友人のような関係を築いている。だからこそ、北城は夕張や天龍と親しく話せるのだ。

「今まで会議だったのか？」

「ええ。でもまあ、それ以外の事で結構大変だったけどね」

「……何かあったのか？」

「まあ、色々とあるのじゃ。ワシらも苦労が多いんじゃないよ」

「そうか。まあ、とりあえずお疲れさん」

「う、うむ」

北城の劳いの言葉に夕張は照れているかのように頬をほんのりと赤らめながらうなづく。そんな戦友の様子に天龍はくすくすと笑うと、「どうした？」と一人不思議そうに首を傾げている北城に「何でもないわ」と言葉を掛ける。

「それじゃ、私はここで失礼させてもらうわ」

突然の天龍の行動に夕張は驚いたような表情を浮かべると、北城の方を一瞥してから背を向ける天龍に慌てて駆け寄り、そんな彼女の手を掴んだ。

「ま、待て天龍。今後の作戦の打ち合わせをするのではなかったのかッ!？」

「うーん、そのつもりだったんだけど。考えてみれば打ち合わせって言っても大した事じゃないし。もう夜も遅いからね。やっぱいいわ」

「そ、そうか。しかしじゃな……」

納得できないとばかりに渋い顔を浮かべる戦友の姿に苦笑しつつ、天龍はそつとそんな夕張の額に軽くデコピンする。驚く夕張の肩をそつと叩き、北城からは見えない角度でそつと彼女の耳元で囁く。
「夜空の下で二人つきりなんて最高の状況じゃない。あんたは少し勇氣を持って行動しなさい。これ命令」

そう言い残し、天龍は夕張の返答を待たずして転移の光に包まれて消えた。

残された夕張は一度北城の方を一瞥すると、今更ながら軽く髪型や服装を整えてから改めて振り返る。その時の彼女の顔は夜空の下でもハッキリとわかるほど赤く染まっていた。

「ほ、北城はまだ警邏の途中か？」

「ああ。これからまた艦内に戻るつもりだが」

「そ、そうか。ならばワシも同行しても構わんか？」

「別にいいが。何でまた」

「そ、そんなの当然じゃ。ここはワシの艦体^{からだ}じゃ。治安を守るのは当然じゃ」

「お、おお。じゃあ、行くぞ」

力強く宣言する夕張の気迫に若干押されつつも、北城は彼女の同行を認めた。そして再び歩き出して警邏を再開する。その背後から夕張も続く。

「ま、待つのがじゃ北城。ワシはこれでも女子^{おな}じゃぞ」

「いや、わかつてるけど」

「な、ならばワシを先導せんか。気の利かん男じゃのお主は」

「す、すまん。えっと……じゃあ 手でも繋ぐか？」

「う、うむ」

北城自身も夕張の事を女子と意識している為か、若干頬を赤らめながら夕張に手を差し出す。そんな彼の手を夕張もまた頬を赤らめながらしっかりと掴み、彼に手を引かれる。

夜空の下、月明かりに照らされながら二人の青年と少女は静かに艦内に消えて行った。

「偽善者ね」

自艦ではなく、実は『夕張』の防空指揮所へと移動して手を繋いで艦内に消えて行った北城と夕張の姿を見送っていた天龍。そんな彼女に壁に背を預けて沈黙していた加古が静かに言った。

「どういう意味よ」

天龍は振り返らず、二人の消えた扉を凝視したまま硬い声で言う。そんな彼女の言葉に加古は「言葉通りの意味よ」と淡々と返す。閉じていた瞳を開け、天龍の背を冷たく見詰める。

「親友の為に自分を犠牲にする。三文小説もいい所よね。バカじゃないの」

「そんなんじゃないわよ。それに犠牲って何よ。意味がわからないわ」

背を向けたまま、嫌味を言われているのに声を荒げる事なく返す

天龍の姿を呆れたように見詰め、加古は「ほんと、バツカみたい」と繰り返す。

「自分が好きな男を、同じく好きな親友に譲る。私には理解できない愚考ね」

そう吐き捨てるように言い残すと、加古は消えた。

神々しく煌く月明かりの下、一人残された天龍は加古からの言葉に悔しそうにギュツと唇を噛む。その頬を、静かに一筋の涙が零れ落ちる。

「……これでいいのよ。これで」

それはまるで、自分自身に言い聞かせるような言葉であつた。

七日、艦隊はブカ島北方を通過。八日にはブーゲンビル島東方海面に達し、一時ここに待機となつた。

同日早朝、艦隊は敵空母の所在確認の為に水上偵察機を発進させた。その最中、艦隊は敵偵察機に発見されるが偽装針路で誤魔化しつつ、艦隊の一斉砲撃でこれを追い払う事に成功した。しかし、偵察機は味方本部に敵艦隊発見の知らせを発信。三川中将は奇襲作戦の失敗に落胆した。

だが、天は第八艦隊に味方していた。敵偵察機が発進した敵艦隊発見の知らせは無駄となつた。実はこの時、受信側の司令部には人がいなかったのだ。これはラバウルの第二五航空戦隊の迅速な反撃空襲の為、司令部の人間全員が防空壕に逃げていた為であつた。第二五航空戦隊の戦果自体は微々たるもので、敵戦闘機を多数撃墜するも敵艦隊にダメージはなくむしろ損害の方が大きかつたのだが、この攻撃によって第八艦隊の存在は知られず、さらに日本機動部隊との戦いで多くの空母が損失もしくは戦闘不能となっている米機動部隊はこの攻撃でさらなる空母の損失を恐れて撤退。三川中将が最も恐れていた敵空母は戦闘区域から離脱した。ラバウル航空隊の決死の攻撃は戦術的には大した戦果はなかつたが、戦略的にはすさまじい大戦果となつた。

一方、敵空母発見の為に発進させた偵察機からの情報によると敵艦隊の布陣は予想よりも強力。第八艦隊は一時ラバウルに向かって転進して様子を見る事となった。この転進がさらに敵の目を欺く形となった。

午後四時、艦隊は再び反転して今度こそガダルカナル島を目指して進撃を再開した。

日没直前の午後四時二〇分、旗艦『鳥海』から手旗信号で全艦に作戦命令が通知された。これは一度も合同訓練した事もないのに急遽作戦に参加する事となった第十八戦隊及び第二九駆逐隊とは無線電話も繋がっていなかった為だ。

作戦命令通知と同時に三川中將は艦上の可燃物破棄を命令した。いよいよ、敵艦隊との戦いが始まるうとしている事を示していた。

帝国海軍ノ伝統タル夜戦ニオイテ必勝ヲ期シ突入セントス。
各員冷静沈着ヨクソノ全力ヲツクスベシ

軽巡『夕張』の甲板でも可燃物投棄作業が行われていた。兵達が縦横無尽に動き回って木製などの可燃物を海中に投棄する。その中には北城と夕張の姿もあった。

「これで大体の可燃物は撤去できたな」

「……いよいよ戦いが始まるのじゃな」

「そうだな……どうした？ お前震えてるじゃなねえか、怖いのか？」

「阿呆。これは武者震いじゃ。如月きんづきと疾風はやての仇が討てるんじゃないからのお」

そう言つて悔しげに唇を噛む夕張に、北城は「そうか」とだけつぶやいた。

如月と疾風。それはかつて夕張が第六水雷戦隊旗艦を務めていた頃に従えていた部下の名前だ。

駆逐艦『如月』『疾風』はウエーキ島攻略作戦で『夕張』を旗艦とした第六水雷戦隊として参加。しかしこの作戦で『疾風』は敵陸上砲で、『如月』は敵機の空襲を受けて沈没した。

……どちらも、夕張にとって信頼できる大事な部下であった。

第一次ウエーキ島攻略作戦は戦力的には日本軍優勢だったのに失敗に終わった。たった数機の敵機に攻略部隊が翻弄された為であった。この結果は人間側でも司令部の怠慢問題となり、艦魂達の間でも部下二人を失った夕張に対して厳しい目が向けられた。部下二人を失った上に、一時的とはいえ仲間達からの信頼まで失ったこの作戦は夕張にとって苦い記憶でしかない。

部下二人を失ったショックと、その責任から禁固刑を受けた夕張を献身的に励ましたのが同作戦に参加していた天龍とその妹の龍田如月と疾風を覗く残存第六水雷戦隊の面々、そして北城であった。

仲間達の励ましから立ち直った夕張。しかし以前までと何ら変わらない様子に見えても、その心の奥底では如月と疾風の仇を討つという強い復讐心が燃えていた。この戦いは、そんな彼女の想いを一杯ぶつけられる戦いとなる。

懷から懷中時計を取り出して現在時刻を確認し、無言で軍帽の鰐を掴み、深く被る夕張。

「夕張……」

「時間じゃ。お主も早く配置に戻れ」

それだけ言い残し、夕張は北城を置いて光に包まれて消えた。呆然と立ち尽くす北城を、上官が呼ぶ。北城は夕張の消えた方向を一瞥してから急いで上官の所へと走った。

「加古ちゃん」

資料を読みながら通路を歩いていた加古はその声を無視して歩き続ける。だが、声の主はそんな加古を捕まえるように後ろからギュッと抱き着いて来た。自分にはない豊満な胸に若干の嫉妬心を抱きつつも、加古は努めてクールだ。

「何の用かしら衣笠。今は戦闘待機中よ。早く自艦に戻りさない」
「ええ、そんな吊れない事言わないでよ。お姉さん泣いちゃうわよ」

「どうぞ勝手に。あんたに付き合ってもらえる程私は暇じゃないの。仕事があるんだから邪魔しないで」

加古は抱きつく衣笠の手を払うと、ズレたメガネを直す。そんな彼女に「まあ、加古ちゃんのいじわる」と拗ねたような表情を浮かべる衣笠。だがそのふざけた表情は次の瞬間には消え、真剣なものに変貌する。

「加古。いつまでそうして悪役を引き受けるつもりなの？」

衣笠の問い掛けに対し、加古はフツツと鼻で一蹴する。表情はいつもと変わらぬ人をバカにしたような笑顔が輝いている。

「何をバカな事を言ってるの衣笠。あんた前々から頭が壊れてると思ってたけど、ついに逝っちゃったのかしら？」

「……軽巡と重巡との壁。ううん、それ以前からあった装甲巡洋艦と防護巡洋艦の壁。両者は近いようで実は全く違う艦艇。だからこそ、お互いの利害の為に意見がぶつかる事もあって、同じ下士官に分類されて入るものの、両者にはずっと確執があった。その確執を、共通の敵を作る事で消す。それがあなたが演じている悪役よね」
「はあ？ 意味わかんない。本当に頭逝っちゃってるんじゃないあんた？」

「でも、今はもう戦時中よ。共通の敵は鬼畜米英に絞られる。それも、海軍全体の共通の敵。そもそも、もう両者の間の確執はいびんと消えたはず。今ではお互いを重要な仲間として認め合い、日本の勝利の為に協力している。もう、あなたががんばる必要はないわ。だから、ね？ 私達の輪に、戻ってきて」

諭すように言う衣笠の言葉に加古は無言だった。顔をうつむかせ、瞳はメガネの反射で見えない。無言で懷から取り出したのは一本のタバコ。ポケットからマッチを取り出し、器用に火を着けて一服する。

「……バカバカしい」

メガネのレンズが煌き、現れたのは鋭い眼光。まるで刃物のような鋭利なその瞳は真っ直ぐに衣笠を射抜く。さすがの衣笠も先輩の本気の瞳には恐怖する。嫌な汗が、全身から噴き出す。

「私が他人の為に自分を犠牲にするような行動を取ると思う訳？

フンッ、言っておくけど、私はそんなお人好しじゃないわ。自分の利益の為に他人も、姉妹すらも犠牲にする。それが私よ。自分で言うのもなんだけど、私は悪役なんて生ぬるいものじゃない、本物の悪ね」

「加古ちゃん……」

「衣笠。いつまでもバカな妄想抱いてないでさっさと持ち場に戻りなさい。そろそろ作戦開始時刻よ、失敗は許されない。いいわね？」

加古は衣笠の返答を待たずして彼女に背を向けて立ち去る。残された衣笠は残念そうに小さくため息を漏らすと、加古とは反対方向へと歩き出す。

「……加古ちゃんね、本当はすごく仲間想いの子なのよ。彼女が冷たく当たる時は、本当に心からその子の事を心配しているから。巻き込みたくないからなの」

「……そんな事、とつくの昔に知ってたわ。私だけじゃない、巡洋艦全員、知っていたわ」

加古からは見えない通路の壁に背を預け、瞳を瞑りながら言ったのは天龍。立ち止まった衣笠はそんな天龍の言葉に「そっか……」と複雑そうな笑顔を浮かべた。

「でも、気に食わない奴だってのは変わらないわ。それだけは言うておくわよ」

瞳を開けた天龍は衣笠を一瞥すると、光に包まれて消えた。衣笠はそんな天龍の転移の光が消えるのを見送ってから、自身も転移の光に包まれて自艦へと戻った。

第二話 それぞれの真実の想い（後書き）

それぞれのキャラの立ち居地を何となく表した今回の話。

さらには本編にちょこつとだけ出ている青葉及び今回が初登場となる古鷹。前回から登場している衣笠、天龍、夕張、加古など今までとは違う巡洋艦ばかりのお話。さらには唯一の人間キャラでありながら脇役扱いの北城など、今回はメンバーが多く登場しました。

そして、物語はいいよ戦闘編へ。ずいぶん久しぶりなので書き方が若干変わっていたり劣化しているかもしれませんが、温かく見守ってください。

次話は第一次ソロモン海戦前編です。前回の神州丸編以来の戦闘シーンとは一体！？（？）

それでは次話は、明日か明後日にでも投稿しますので。

感想などありましたらぜひにも。

では〜。

第三話 第一次ソロモン海戦 前編（前書き）

今回はサブタイトル通り、第一次ソロモン海戦の前編を描きます。約2話分の戦闘シーンを無理やり分割したのでちよつと妙な終わり方をしていますが、その辺はあらかじめご了承ください。

久しぶりの艦魂での戦闘シーン。見苦しい点が多々あるとは思いますが、許してくださいね？

それでは第一次ソロモン海戦前編、どうぞ。

第三話 第一次ソロモン海戦 前編

午後九時、ガダルカナル島に接近した第八艦隊は重巡『鳥海』、『青葉』、『加古』の三隻から偵察機を発進させた。これは偵察任務ではなく敵艦隊を発見したら吊光弾を投下して闇の中の敵艦隊を照らし出す役目を負っていた。

この時、艦隊は旗艦『鳥海』を先頭に重巡『青葉』、『加古』、『衣笠』、『古鷹』、軽巡『天龍』、『夕張』、殿役として駆逐艦『夕風』の順番で単縦陣を形成し、十六ノットに増速してサボ島とエスペランス岬の間のシーラーク海峡を目指していた。

シーラーク海峡に突入し、ルンガ岬沖の敵艦隊を雷撃。その後ツラギ島周辺の敵艦隊に突撃する。これが今回の作戦の内容であった。

午後十時、三川中將は総員戦闘配置を命令。艦隊は戦闘態勢に移行し、艦隊速力も二六ノットまで増速させた。

午後十時四〇分、第八艦隊は単縦陣のままサボ島南方水道に突入した。

先頭を走るのは艦隊旗艦である重巡『鳥海』。その艦橋には艦隊司令長官の三川中將を始めとした第八艦隊司令部と『鳥海』艦長の早川幹夫大佐が陣取っていた。はやかわ みきおその中に、艦魂である鳥海の姿もあった。

旗艦である『鳥海』は艦隊の中では新鋭艦。つまり、旗艦を務める鳥海は参加艦魂の中では一番若手であった。いつもは姉達の補佐をするのが自分の役目であったが、今回は先輩達を率いる艦隊の旗艦。その緊張は計り知れない。

艦橋の窓から闇を見詰める鳥海の手は、先輩達を率いての実戦という緊張と、姉の下ではなく自分自身が旗艦となって艦隊を指揮する興奮とで震えていた。

鳥海は震える手で懷からメモ帳を取り出すと、その最初のページを開いた。そこには大好きな姉、愛宕あたごが自分に託した言葉が書かれていた。

死ぬ気になるな。死ぬ一歩手前が一番いいんだ

あの真面目が服を着て歩いている愛宕が言ったとは思えない言葉。この言葉を貰った時、愛宕は「命を懸けるのは大事。だけど、だからと言って命を投げ出すのは愚行。生き残ってこそ、戦う意味があるんだから。死ぬんじゃないわよ」と言って自分の頭を撫でてくれた。

この戦い、敵の総戦力は我方の倍以上。前衛だけでも叩けたとしても、後続の敵本体と戦う事になれば劣勢な戦力しかない自分達は壊滅的打撃を受ける事になる。それこそ、死ぬかもしれない。

「死ぬ気になるな。死ぬ一歩手前が一番いいんだ……」

鳥海は姉から託された言葉を何度も繰り返し返しながら、決意を固める。

「姉さん、私はこの戦い……必ず勝って、生きて帰ってみせるから」
そう決意し、鳥海はグツとメモ帳を握り締めると、それを再び懷へと戻した。

「右舷敵艦発見ッ！ 距離八〇〇〇乃至一万メートルッ！」

その報告に、鳥海の表情が再び引き締まった。

この時、先頭を走る『鳥海』の右舷九〇〇mをすれ違うように米駆逐艦『ブルー』が走行していた。しかし『ブルー』に搭載されていたレーダーは旧式であり、鳥影による乱反射でまともに機能しておらず、第八艦隊の存在に気づいてはいなかった。

すぐさま全艦が『ブルー』に全砲門を向けるも、三川中将はこれを見逃す事を決めた。これはもしもこの駆逐艦が囷だった場合、たった一隻の駆逐艦の為にだけに奇襲攻撃が無駄になる事を良しとしない判断からだった。

第八艦隊と米駆逐艦『ブルー』はそのまま何事もなくすれ違った。直後に今度は左舷に米駆逐艦『ラルフ・タルボット』が出現。しか

しこれも第八艦隊には気づかず、第八艦隊も見逃す事にした為戦闘にはならなかった。

この二隻は後に第八艦隊を発進した水偵を発見して本部に報告するも、航空機として報告した為にこれが日本艦隊来週の兆候という事を見逃してしまった。そればかりかこの時連合軍の司令部面々は揃って上陸作戦などに関する今後の対応を決める為に上陸部隊旗艦、輸送艦『マーコレ』に集まっており、連合国艦隊は司令官不在という状態であった。

連合国艦隊は北方部隊（重巡洋艦三隻、駆逐艦二隻）、南方部隊（重巡洋艦二隻、駆逐艦二隻）、東方部隊（軽巡洋艦二隻、駆逐艦二隻）、哨戒隊（駆逐艦『ブルー』『ラルフ・タルボット』）の四部隊に分かれて泊地の三つの出入り口を警備していた。戦力的には第八艦隊に勝っている連合国艦隊だったが、第二五航空戦隊の猛空爆による長時間の戦闘待機による兵の疲労、偽装針路による日本艦隊の夜襲はないという誤った判断、さらには司令官不在という危機的状況にあった。

これらの要因が全て第八艦隊の幸運へと繋がっていった。

第八艦隊は先程すれ違った敵駆逐艦警戒の為に殿を務めていた駆逐艦『夕風』をシーラーク海峡の入口に残し、残る全艦でシーラーク海峡に突入した。

無事にシーラーク海峡に突入した第八艦隊はそのまま前進を続ける。兵達とはつくの昔に戦闘態勢に入っており、命令があればすぐに攻撃が可能という状態で待機していた。

艦魂達もそれぞれの場所から来るべき戦いに備えている。鳥海は艦橋で、古鷹は第一主砲の上で、加古は艦橋で、青葉は第二主砲の上で、衣笠は防空指揮所で、天龍は見張り台の上で、夕張は北城と共に第二主砲の中にいた。

午後十一時半、旗艦『鳥海』に乗る三川中将から全艦に《全軍突

撃せよ』の命令が下った。

三川中将による突撃命令が下った直後、先頭を走る『鳥海』が左舷約一万五〇〇mに米駆逐艦『ジャービス』を発見した。この『ジャービス』は第二五航空戦隊の空爆を受けて損傷していた為、連合艦隊の隊列から離れて夜間警戒をしていたのだ。

艦橋から敵駆逐艦の姿を捉えた鳥海はギョツと懐に入れたメモ帳を握り締めた後、第二主砲の上に転移。腰に下げた軍刀を引き抜くと、敵駆逐艦に狙いを定める。同時に、『鳥海』の六一cm連装魚雷発射管二基が動き、敵駆逐艦『ジャービス』に向けられる。

夜の海を翔ける『鳥海』と『ジャービス』の距離はいよいよ五〇〇mを切った。その瞬間、早川艦長と鳥海の声が重なった。

「攻撃開始ッ！」

鳥海が軍刀を敵駆逐艦に向かって振り抜いた瞬間、『鳥海』から四本の魚雷が発射された。その直後、今度は右舷に敵巡洋艦二隻を発見。すぐさま上空を飛ぶ水偵が向かい、敵艦隊上空で吊光弾を投下した。

夜の闇を吹き飛ばし、まるで小さな太陽の明るさのように輝く吊光弾。その下に現れたのは豪重巡洋艦『キャンベラ』、米重巡洋艦『シカゴ』、米駆逐艦『バグレイ』、『パターンソン』の南方部隊であつた。

「見つけた敵主力ッ！」

現れた敵の主力部隊に鳥海は興奮したように叫ぶ。軍刀を握る拳が震える。恐怖ではない、この戦場での高揚感。鳥海は初めて自分が戦う為に生まれてきた兵器の魂であるという事を自覚した。この震えは恐怖ではない 武者震いだ。

すでに後続艦も次々に照らし出された敵艦隊に砲門を向けている。そんな中、鳥海は再び敵艦隊の先頭を走る敵重巡洋艦に向かって構えた軍刀を振り抜いた。同時に、敵重巡洋艦に向かって『鳥海』から四本の魚雷が発射された。

南方部隊の先頭を走っていたのは『キャンベラ』であった。上空で輝く吊光弾を見上げ、茶髪のサイドテールをした翠眼の少女重巡『キャンベラ』艦魂、キャンは悔しげに唇を噛んだ。

「敵の夜襲はないって言ってたじゃないッ！ 攻撃準備はまだ整わないのッ！？」

万全の状態で攻撃に入った第八艦隊に対し、連合国艦隊は完全に奇襲された形となって全く攻撃準備が整っていなかった。その為、満足な反撃もできぬまま

ズドオオオオオンッ！ ドオオオオオオンッ！

「あああああああッ！？」

『鳥海』から放たれた四本の魚雷のうち、二本が『キャンベラ』に命中した。その瞬間、キャンの脇腹が砕け、大量の血が噴き出す。想像を絶する苦痛にキャンは絶叫し、その場に崩れ落ちる。口からは吐血を吐き、憎々しげに日本艦隊を睨み付ける。

「ジャッブめ……ッ！」

その瞬間、『鳥海』の主砲が一斉に火を噴いた。続けて後続の重巡四隻も一斉に砲撃を開始。数秒の沈黙の後、『キャンベラ』は飛来した無数の砲弾に串刺しにされた。砲弾が艦体を貫き、爆発し、鉄の体が砕け飛ぶ。燃え上がる炎が様々な物に引火し、瞬く間に炎上した。

燃える自分の艦体^{からだ}に横たわるキャン。殺意と憎しみに満ち溢れた瞳で砲撃を続ける日本艦隊を睨みつける。『鳥海』から放たれた砲弾を多数被弾した『キャンベラ』。その艦魂であるキャンは右足を失い、血に塗れ、満身創痍の状態。だが、その瞳に燃える憎しみの炎だけは、まるで自身を焼く炎のように激しく燃え盛っていた。

「……殺す……ッ、……殺す……ッ、……殺す……ッ！」

炎上する『キャンベラ』は、まるでキャンの意志に応えるかのよう^{よう}に使用可能な砲門や機銃で応戦する。しかし命中弾はなく、逆に日本艦隊からの砲弾を多数受け、『キャンベラ』は航行不能となった。

先頭を走る『キャンベラ』が被弾したのを見て後続の『シカゴ』が指揮を代行して反撃を開始した。

前方を走る重巡洋艦部隊の猛烈な砲撃の嵐に敵艦隊が次々に炎上していく光景を、第二主砲の上に移動した夕張は緊張した面持ちで見詰めていた。

「これが帝国海軍伝統の夜戦……美しいのぉ」

大砲から放たれる火炎、命中した時に上る爆炎。根本が兵器の魂である艦魂にとって、戦闘の光景は本能的にすばらしい光景に見える。今自分達はこれまで延々と訓練を続けて身に付けた夜戦の技術を駆使して敵艦隊を翻弄している。その事実、心が震える。

加えて重巡洋艦五隻に続き、先程から『天龍』『夕張』も砲撃を加えている。戦闘に参加しているのだ。

「撃って撃って撃ちまくるのじゃッ！ 敵をこのソロモンの海から駆逐してくれるッ！」

興奮する夕張。だがそこへ敵が放った砲弾が命中した。しかし爆発はしなかった。幸いにも『夕張』に被弾した砲弾は不発弾だった為、『夕張』は大した被害を受ける事なく攻撃を続行する。

頬に一本の浅い切り傷が生まれ、血が流れる。その血を指で拭いた夕張は指の先端についた血を舐め、口元に不敵な笑顔を浮かべる。「敵もやりおる。じゃが、夜戦でワシら帝国海軍には勝てんぞッ！」夕張の声に呼応するように、第八艦隊の砲撃はさらに激化する。

戦いは完全に第八艦隊優勢のまま進んでいた。

日本艦隊からの一方的な砲雷撃に対し駆逐艦『パターソン』が照明弾を発射して応戦するも『天龍』が放った一撃で中破。『パターソン』は逃げるように撤退した。

重巡『シカゴ』は突撃して来る日本艦隊に向かって反撃を試みようとすると、総員配置が終了する前に艦首に魚雷が命中して大破。戦線離脱を余儀なくされた。

わずか数分の砲雷撃戦で連合国艦隊南方部隊は壊滅した。この間に第八艦隊は『夕張』が不発弾を受けたのと、『天龍』が羅針盤を故障した程度の損害らしい損害はなく、敵の中枢を目指して第八艦隊はさらに進撃を続けた。

連合国艦隊南方部隊を壊滅させ、次なる敵を目指して単縦陣で進む第八艦隊。そんな彼らの前方、闇の向こうから灯籠流しのような火が近づいてくるのが見えた。それは第八艦隊の猛攻撃を受けて炎上大破し、操舵不能となった豪重巡洋艦『キャンベラ』であった。

第八艦隊五番艦、重巡洋艦『古鷹』の第一主砲の上に軍刀を杖代わりにして悠然立っている古鷹。十時方向から近づいてくる炎上中の敵艦を見詰め、顔をしかめる。

「……取舵か」

直後、『古鷹』は近づいてくる敵重巡洋艦との衝突を回避する為に左に急速回頭。

艦が斜めに傾くほどの急激な左旋回をする『古鷹』は何とか敵重巡洋艦との衝突を回避できた。

両艦は至近距離ですれ違う。それこそ、相手の艦の惨状を目視できる程の距離だ。

古鷹は敵とはいえ荒れ狂う炎に焼かれ、艦上物がごとく破壊されている敵艦の姿に顔をしかめた。燃える甲板では必死の消火作業が行われており、そこかしこに兵の死体が転がっている光景はさながら地獄絵図だ。

その時、古鷹は敵艦の炎上中の第一主砲の上に敵の艦魂らしき少女の姿を見た。血に塗れ、右足を失ったその姿はまさに満身創痍。だが、西洋剣を杖代わりにして彼女は勇ましく立っていた。向こうもこちらに気づいているのだろう。憎々しげに歪み、殺気に満ち溢れた眼光で彼女は古鷹を睨みつけていた。その死んではない瞳を見て、古鷹はその場で敵の艦魂に向かって敬礼した。

その決して諦めない根性とボロボロの体なのに必死に立ち続ける
勇姿は、敵ながら賞賛に値する。そんな敵の艦魂に対し、古鷹は最
上級の敬意を込めて武人として敬礼したのだった。

燃える主砲の上で気合だけで立っていたキャンは、すれ違う敵の
重巡洋艦の一番砲塔の上に敵の艦魂を見つけた。

悔しくて、憎くて、許せなくて。様々な怒りの感情が渦巻き、キ
ャンはそんな敵の艦魂を視線だけで殺すような勢いで睨み付ける。
だが、敵の艦魂はそんな自分に向かって敬礼した。その瞬間、キヤ
ンの中で黒く渦巻いていたものが消えた。憎しみが消えた訳では
ない。今でも敵を殺したいという復讐心は根強く燃え盛っている。
だが、敵である自分に向かって最上級の敬礼をする敵の艦魂の姿を
見て、同じ海軍軍人として彼女と戦えた事に誇りが生まれたのだ。
「……何だつてのよ……バカ……」

キャンは複雑な笑みを浮かべると、敬礼する敵の艦魂に向かって
静かに答礼する。その直後、キャンは崩れ落ちた。

豪重巡洋艦『キャンベラ』回避の為に左へ回頭した『古鷹』。
前方艦が針路を変更した為、後続の『天龍』『夕張』もこれに倣っ
て取舵を回して左へ回頭し、第八艦隊は旗艦『鳥海』率いる『青葉』
『加古』『衣笠』の本隊と『古鷹』を先頭にした『天龍』『夕張』
が続く別働隊に分かれた。

二手に分かれて北上する事になった第八艦隊だったが、これが後
に思わぬ効果を生む事になった。

第八艦隊本隊の先頭を走る旗艦『鳥海』は左舷側、闇の向こうに
先程撃滅したのとは別の敵艦隊を発見した。本隊はすぐさまその敵
艦隊に向かって突撃を開始する。

波を蹴散らしながら勇猛果敢に突撃する『鳥海』。その艦橋で鳥
海は再びメモ帳を取り出し、姉の言葉を見詰める。

「死ぬ気になるな。死ぬ一歩手前が一番いいんだ……だつたら、死ぬ一歩手前くらいがんばるッ」

自身を奮い立たせるように力強くそう言つと、鳥海はメモ帳を懷に戻し、決意に満ちた瞳で闇の向こうの敵艦隊を見詰める。そして、夜戦においての旗艦の決意を叫んだ。

「私の命、皆さんにお預けしますッ！ 探照灯用意ッ！」

「敵艦隊に探照灯照射ッ！ 闇からいぶり出せッ！」

鳥海の叫びの直後、早川艦長は探照灯の照射を命令した。

探照灯とは艦に搭載されている強力なライトの事で、夜戦においては偵察機からの吊光弾、砲撃による照明弾と同じく敵艦に向けて照射して闇の中から引きずり出す為のものだ。夜戦においては主に旗艦がこの役目を負うのだが、当然探照灯を使うという事は敵からもこちらが丸見えになる。その為、敵艦の姿を引きずり出すと同時に敵艦からの集中砲火を浴びる事にもなる、まさに諸刃の剣。

早川艦長の命令に従い、『鳥海』は探照灯を照射。鳥海は自身が敵の的になるという事実には恐怖しながらも、自身を奮い立たせて探照灯の先を見詰める。

右へ左へと探照灯が動き、ついに闇の向こうに敵艦隊の姿を発見した。この時、『鳥海』の探照灯に照らし出されたのは連合艦隊北方部隊であった。南方部隊が敵と交戦状態に入つたとの情報に現場に急行した所であった。しかし第八艦隊の突然の奇襲攻撃に加えて司令官不在の為に情報が錯綜しており、まだ状況を把握していない所で第八艦隊と遭遇してしまつたのだ。

『鳥海』の探照灯が最初に捉えたのは米重巡洋艦『アストリア』。しかし『アストリア』は自艦に照射して来た『鳥海』率いる第八艦隊を味方艦隊と誤認。照射の停止を通報し、尚且つその味方艦隊と合同で敵艦隊撃滅に向かう事を決定してしまう。その結果、第八艦隊は無防備な北方部隊に容易に接近する事ができた。

艦橋でこの様子を見ていた鳥海はグツと拳を握ると、腰に下げた軍刀を引き抜き、探照灯の光に照らし出された敵重巡洋艦に向かつ

て、構えた軍刀を指揮棒のように前に振るった。

「撃ち方始めッ！」

鳥海の叫びのすぐ後、『鳥海』の主砲が一斉に火を噴いた。

第八艦隊本隊三番艦『加古』は旗艦『鳥海』の一斉砲撃に続き、『鳥海』の探照灯に照らし出された敵重巡洋艦に向かって砲撃を開始した。静寂を打ち破る爆音と共に火炎が迸り、砲弾が主砲から撃ち出される。

艦橋にて戦況を見詰めていた加古はズレたメガネを右手の人差し指で直し、クールな表情のまま『鳥海』の探照灯に照らし出される敵重巡洋艦を見詰める。

「……弱過ぎるわね。話にならない」

すでに戦況は第八艦隊が完全に優勢となっている。加古はもはや作戦の成功を確信し、これ以上見ても仕方がないと判断して踵を返す。

艦橋から出て行く寸前、ふと思い出したように足を止めると振り返る。視線の先には同じく砲撃を開始した四番艦『衣笠』が見える。その背後には後続艦の姿はない。

「……迷子にでもなったのかしら。これだから軽巡は」

そう吐き捨てるよういつつも、しばし姿を消した三隻を探すように辺りを見回した後、諦めたようにため息すると無言のまま艦橋を出て行った。

その間も、『加古』の砲撃は続く。

四番艦『衣笠』もまた闇から引きずり出された敵艦隊に向かって猛烈な砲撃を加えていた。

防空指揮所からこの光景を見詰めていた衣笠はいつもと変わらぬ柔和な笑みを浮かべていた。

「あらあら、敵さん反撃らしい反撃をして来ないわねえ。これじゃまるで私達が弱い者いじめをしてるみたいじゃない。まあ、み

んなが怪我しないのが一番だけどねえ」

砲声轟くソロモンの海を見詰めながら、衣笠は絶えず笑みを浮かべ続ける。だが、その笑顔は敵艦の爆発と共に消え去る。

衣笠の見詰める先で『アストリア』が被弾して火柱が上る。探照灯に照らされなくても約四〇〇〇～五〇〇〇m離れていても『アストリア』の姿は丸見えになる。各艦は炎上して的和化した『アストリア』に向けて容赦のない砲撃の嵐を叩き込む。

自身の主砲も炎上する敵重巡洋艦に向けて砲撃を続ける。次々に命中弾を受けて爆発、さらなる火災を起こして炎上する敵艦を見詰めながら、衣笠は軍帽を深く被って目を隠す。

「ごめんなさいね。これが戦争なのよ……」

そうつぶやくように言った彼女の言葉は、闇夜を切り裂く怒涛の砲声に掻き消された。

米重巡洋艦『アストリア』に甚大な損害を与え、旗艦『鳥海』は続いて後続の米重巡洋艦『クインシー』に照準を合わせ、再び猛烈な集中砲火を開始した。これに倣い、後続の三隻も『クインシー』に向かって砲撃を開始する。

全く準備の整っていない『クインシー』は反撃できず、『鳥海』以下第八艦隊本隊の総攻撃の嵐に翻弄されるばかり。そしてついには被弾して火災が発生。不幸にも搭載していた艦上機が爆発し、付近にあった燃料などにも引火。これが格好の的になってしまった。

闇の中、炎を立ち上げながら走る『クインシー』はただの的ではない。第八艦隊本隊は容赦なく的和化した『クインシー』に向けて猛烈な砲撃を続ける。

その時、先程南方部隊との戦いで分裂した重巡洋艦『古鷹』率いる第八艦隊別働隊が到着。『クインシー』に向けて突撃を開始した。

第三話 第一次ソロモン海戦 前編（後書き）

久しぶりの戦闘シーン、いかがでしたでしょうか？

ずいぶん書いていなかったたので勝手がわからず苦労しましたが、何とか人並みの作品になったのでこうして投稿したのですが。

今作は第八艦隊の艦魂だけではなく、戦闘シーンにちよこつとだけ敵の艦魂を挟んでいます。前編では豪重巡『キャンベラ』の艦魂のキャン。やっぱり艦魂作品となるとキャラの血まみれ率が上がるのでどうも……

これだから艦魂とモンハンじゃキャラの扱い方が違うと言われるんですよね（苦笑）

今回は引き続き第一次ソロモン海戦、後編となります。一応予定ではその次が最終話となっています。なので、日曜日には完結できそうです。

それではこの作品ではあ問わずかですが、最後までどうかよろしくお願いします。

ではで〜。

第四話 第一次ソロモン海戦 後編（前書き）

またも予定が狂ってしまい、こんな時間帯での投稿すみません。

最終話の執筆に手間取ってしまい、ここまで伸びてしまいました。相変わらず有言実行ができなくてほんとすみません。

しかし、何とか明日には最終話を投稿しますので。今度こそ本当です（ここ重要）

今回は前回に引き続き第一次ソロモン海戦の後編です。それでは早速どうぞ。

第四話 第一次ソロモン海戦 後編

「くそお、出遅れたか。全艦突撃いッ！」

軍刀を引き抜き、指揮棒の如く振るい突撃命令を叫ぶ古鷹。その声に応えるように『古鷹』は増速する。彼女の見詰める先には今まさに本隊の砲撃を受ける敵艦隊の姿がある。

白波を蹴散らしながら現場に急行して来た『古鷹』率いる別働隊。『古鷹』はすぐさま炎上している『アストリア』に向かって砲撃を加えてから、本隊が集中砲火する『クインシー』に向かって一斉に砲雷撃を開始。

別働隊の参戦により北方部隊は右舷側から本隊、左舷側は別働隊に挟撃される事になった。

別働隊二番艦『天龍』もまた『古鷹』に続いて砲撃を開始した。自身の主砲が爆音を響かせながら砲撃を加えている様を、艦橋の上に立つマストの見張り台から見詰める天龍。

「手を抜くの敵に対する最大の侮辱。だから、一切容赦なんかしないわよ」

本隊と自分達別働隊に完全に挟撃されて一方的に攻撃を受けるしかない敵艦隊を見詰めながら、天龍は真剣な表情を崩さない。

この時点ですでに勝敗は決していると言っても過言ではない。だが、だからと言ってここで敵を見逃す訳にはいかない。日米には小細工程度では埋められないだけの戦力差がある。ここでその差を少しでも埋めなければ、日本の勝利はない。だから、天龍は容赦をしない。戦争は、そういうものだ。

砲撃を続けながら、別働隊は魚雷も発射した。そして、そのうちの何本かの魚雷が『クインシー』に命中。すでに多くの被弾を受けていた『クインシー』は満身創痍の状態だった。

荒れ狂う炎の海の中、彼女はボロボロの体にムチを打って必死に

その場に立っていた。

体中から噴き出す真っ赤な血。彼女はその血に全身を真っ赤に染めながら、激しく肩を上下させながら、全身に走る激痛に耐えながら、彼女は必死に立っていた。

手に握るのは刀身に無数のヒビが入った両刃の西洋剣。元々は美しい剣だったのだろうが、無数のヒビ割れを起こし、煤焦げ、傷だらけになり、持ち手の血にその身を濡らしている。

荒い息を繰り返しながら、自分と同じ状態のボロボロの剣を杖代わりにして立ちながらも、しかし彼女のエメラルドグリーンの瞳は決して死んではいなかった。自身を焼く炎よりも激しく、彼女の瞳には闘志の炎が燃え滾^{たぎ}っている。

「まだ……、まだよ……ッ、まだ負けてない……ッ」

腹の底から叫ぶと言うと、少女は口の中いっぱい溜まった血を吐き捨て、鋭い眼光で自分に探照灯を向ける敵重巡洋艦を睨み付ける。激しい風に彼女のきれいな金髪のポニーテールが激しく揺れる。

「せめて……、一矢報いなきや……死んでも死に切れないッ！」

力強く叫び、少女　米重巡洋艦『クインシー』の艦魂、クインは相棒の西洋剣『ネイビースピリット』を構える。彼女の想いに応えるように、ネイビースピリットも炎の光を力強く反射して光り輝く。

「うああああああッ！」

絶叫するような叫びと共に、クインは残る力を振り絞ってネイビースピリットを探照灯を照射している敵重巡洋艦に向かって振り下ろした。同時に、『クインシー』の使用可能全砲門が一斉に火を吹いた。

放たれた多数の砲弾は先頭を走る敵重巡洋艦に次々に襲い掛かる。巨大な水柱が何本も立ち上り、ついにはそのうちの一発が敵艦に命中。敵重巡洋艦の艦橋付近が爆発した。

その光景を目に焼き付けた直後、敵艦隊が一斉に反撃の集中砲火

を開始。無数の砲弾が次々に『クインシー』の艦体を貫き、火炎が吹き荒れる。

刹那、クインの立つ第一主砲に砲弾が命中し、巨大な爆発がクインに襲い掛かる。

激しい爆風に彼女の持つネイビースピリットは砕け散り、クインのポニーテールを結っているリボンも吹き飛び金色の長髪が暴れ、直後クインは激しい炎の中に消えた……

敵重巡洋艦『クインシー』からの最後の反撃。その狙いは全て探照灯を照らして敵からも丸見えとなっていた『鳥海』に集中。『鳥海』は無数の砲弾の水柱のカーテンに囲まれた末、うち一発が艦橋付近に命中した。

火災が発生し、すぐに兵達が消火作業を開始する。被害自体は大きな事はなく先頭は続行された。

だが、被害自体は大した事はなくても死者は存在する。そして、艦が傷ついたという事は、艦魂もまた怪我を負うという事。

被弾した事で若干の混乱に陥る艦橋に、鳥海は壁に背を預けるようにして座り込んでいた。

「くう……ッ」

まるで棍棒で頭を殴り倒されたかのようにこめかみの少し上付近から血が滲み出し、顔の右半分を血に染め、傷口を手で押さえながら苦しげに表情を顰める鳥海。

血に濡れて開けられない右目は閉じ、痛みには耐えながら左目で見詰める先には、先輩達の猛反撃に多数の命中弾を受けて大炎上して戦闘不能となった『クインシー』の姿があった。

「鳥海ッ！」

転移の光を纏いながら鳥海の目の前に現れたのは青葉であった。青葉は鳥海の痛々しい姿を見て一瞬絶句した後、慌てて手に持つ救急箱を開いて手当てを始める。

「鳥海、大丈夫？」

「は、はい……。被害自体はそれほど大きくはないので」

「そう、良かったあ……」

青葉は心からほっとしたような笑みを浮かべる。そんな先輩の笑顔を見て、鳥海はちよっと嬉しくなって笑みを零した。

青葉は鳥海の傷口に薬を塗り、包帯を巻いて応急手当とする。青葉の迅速な手当てを受けた鳥海は「あ、ありがとうございます」と青葉に感謝しつつ、外から響く爆音と振動を全身で感じながら左目で青葉を見詰める。

「……私の事はもう大丈夫ですから、青葉さんは戦闘に戻ってください」

鳥海 of 言葉に一瞬躊躇した青葉だったが、そこは彼女は古参の海軍軍人。今自分が成すべき事は敵艦隊を殲滅する事だという事は重々承知している。青葉は小さくうなずくと「無理しないでね」と言い残して光に包まれて消えた。

青葉がいなくなると、鳥海は壁に手を着きながら立ち上がると窓に近づき、現在も続く戦闘を見詰める。彼女の前に広がっている戦況は、すでに自分達の優勢が決定的となっていた。

「……姉さん、私やったよ」

そうつぶやき、鳥海は懐に入れたメモ帳を服越しに握り締めた。

重巡洋艦『クインシー』を撃破した第八艦隊は続いて残る米重巡洋艦『ヴィンセンス』に目標を変更して集中砲撃を開始。

単艦で挟撃して来る第八艦隊を相手にする事になった『ヴィンセンス』。だが当然勝ち目ではなく、第八艦隊の猛攻撃を受けて何発かの砲弾が命中。そのうちの一発が艦載機を爆破して火災を発生。『クインシー』の二の舞となった。

火災の炎が的になってしまい、『ヴィンセンス』はさらに集中砲火を受ける。もはやともに戦闘もできなくなった『ヴィンセンス』は慌てて反転離脱しようと大きく舵を切った。

「逃がさないわよ」

衣笠は手に握った桜模様の鉄扇をバツと開き、逃げる敵重巡洋艦に向けて振るう。その瞬間、『衣笠』は魚雷を一斉に発射した。他の艦も一斉に魚雷を発射する。狙うは逃げようと転進する敵重巡洋艦。

魚雷を発射した後も『衣笠』の砲撃は続く。それらの砲撃を見詰め、衣笠はスツと先頭を走る『鳥海』を一瞥する。先程敵弾が命中したが、今はもう火災も鎮火されて攻撃を再開している。

艦自体の被害は大した事はない。だが艦橋付近に被弾したという事は艦魂である鳥海は頭に傷を負ったのだろうと簡単に予想ができる。砲弾が命中するというのは、艦魂にとってはそれこそ刃物で切り付けられたり棍棒で殴られるだけの痛みとなつて襲い掛かる。

守らなければならぬ後輩。最上型、利根型と彼女にも後輩がいる為に重巡艦魂的には中堅である鳥海だが、それでもみんなの妹として皆に可愛がられている大切な子。そんな彼女を傷つけられた怒りは、計り知れない。

『鳥海』が被弾した後、各艦の砲撃がより激しいものになったのは艦魂達の静かなる怒りの表れなのかもしれない。

風に揺れる艶やかな長髪を手で押さえながら、衣笠は燃える敵艦を射抜くように見詰める。

「私の可愛い後輩に怪我をさせた罪は、戦艦よりも重いわよ」
真剣な瞳を敵艦に向けながら、衣笠はつぶやく。

その時、『鳥海』の探照灯に照らされる敵重巡洋艦の左舷で三本の水柱が爆音と共に立ち上るのが見えた。本隊の放った魚雷のうち、三本が命中したらしい。

衣笠はそれを見詰め、開いていた鉄扇をパチリと閉じる。まるで、全てが終わったと暗示させるかのように……

敵艦隊に向かって突撃する別働隊。その三番艦『夕張』は本隊と自分達別働隊の挟撃に翻弄される敵重巡洋艦に向かって背後から一

斉に魚雷を発射した。その直後、敵重巡洋艦の左舷に三本の水柱が上るのが見えた。本隊の放った魚雷が三本命中したらしい。そう解釈するのは当然であつた。

「鳥海達もやりおるのお。じゃが、ワシだつて負けてはおらんぞ」
そう言つて、夕張は不敵な笑みを浮かべた。その直後、『夕張』の放った魚雷のうち一本が敵重巡洋艦に命中した。その瞬間、夕張は「命中じゃッ！」と大喜びする。敵重巡洋艦はその一撃で一気に速度を落とし、夕張は敵が航行不能に陥つたと判断し、拳を強く握り締めた。

爆発を起こし、燃える敵艦を見詰めて夕張は自分達の勝利を確信した。

この『夕張』の放った魚雷が致命傷となり、敵重巡洋艦『ヴィンセンス』は大破航行不能となつた。

そして、この一撃を最後に第八艦隊の猛攻撃が終了した……

日を跨いで行われた第八艦隊による夜襲作戦は見事成功し、炎上する敵艦に背を向けてバラバラになっていた艦隊を再編成する為に全艦サボ島北方海域に集結するよう命令が下つた。各艦はそれぞれの戦闘を終えてその命令に従い撤退を開始する。

各艦が闇に紛れて集結海域に急行する中、敵重巡洋艦『ヴィンセンス』に止めを刺し意気揚々と引き上げる『夕張』もまた集結海域に向かつて急行していた。

高速で闇の海を翔ける『夕張』。そんな彼らの目の前に戦闘前にすれ違った敵哨戒隊所属の駆逐艦『ラルフ・タルボット』が出現。すぐさま『夕張』は『ラルフ・タルボット』に向かつて攻撃を開始した。

容赦なく砲撃を加える『夕張』。第二主砲の上で軍刀を構えながら夕張は一方的に砲撃を受ける敵駆逐艦を見詰めている。

「なぜ反撃をして来ないのじゃ？」

先程から『夕張』が一方的に攻撃をするという状態だ。敵からの

反撃がなく、夕張は困惑げに首を傾げた。その時、敵の駆逐艦から発光信号が送られて来るのが見えた。それを見た夕張は敵がなぜ反撃して来ないのかを悟る。

「……ワシを味方と誤認しておるのじゃな」

艦橋でも夕張と同じ結論に至り、『夕張』はさらなる猛攻撃を開始する。

「こういう卑怯な真似はあまり好かんのじゃが、許せ。これも戦争じゃ」

軍帽を深く被って瞳を隠し、夕張は静かに構えた軍刀を一回転させて華麗に鞘に戻す。カチリと鞘に納められた瞬間、敵駆逐艦は爆発炎上した。

サボ島北方海域に集結した第八艦隊。再び単縦陣を形成し、命令があればすぐにソロモン海域を離脱できる準備を整えていた。だがこの時、旗艦『鳥海』艦橋に陣を張る第八艦隊司令部は紛糾していた。

「何を恐れる必要があるのですッ！ 我々の目的は敵の輸送船団を撃滅する事ッ！ 今目の前にはその撃滅すべき輸送船団が裸の状態でありますッ！ すぐにでも再突入して敵の輸送船団を叩くべきですッ！」

声を荒げながらそう叫ぶのは『鳥海』艦長の早川であった。早川は今回の作戦の第一目標は敵の大輸送船団であるという事、味方艦隊の損害はほばないに等しい事、すでに敵の護衛艦隊は機能していない事などを挙げて再びガダルカナル近海に突入して敵の輸送船団を撃滅すべしと意見を突き通していた。

「確かに、我々の目的は敵の輸送船団の撃滅だ。しかし、この海域には所在は不明だが敵の空母部隊がいる事は確かだ。このまま戦えば夜明けと共に艦載機の攻撃に遭い、我々は甚大な被害を受ける事になる。我々は今回の夜戦で日本海海戦以来の水上艦同士の戦いで大勝利を納めたのだ。それで良いではないか」

一方、そんな早川の再突入論に対し早期撤退論を提示したのは第八艦隊参謀長の大西新蔵少将。おおにしんぞう彼は敵の空母部隊がどこにいるかわからない事、まもなくソロモンの海が夜明けとなり夜が明ければその空母部隊から反撃の艦載機部隊が襲い掛かって来る事、もし再突入すればその艦載機部隊からは逃げる事はできない事を挙げて早期撤退を考えていた。

司令部は再突入論と早期撤退論、それぞれの派に分かれて怒鳴り合いの議論となった。そんな彼らの言葉を艦隊司令長官の三川中将は静かに聞いていた。

三川と同じくこの光景を静かに見守る者がもう一人、鳥海であった。鳥海自身、この難しい判断に考えが揺れていた。

帝国海軍伝統の夜戦において、自分達は大戦果を挙げた。しかし肝心の敵輸送船団は叩けていない。でもこれ以上この海域に留まるのは敵の空母の格好の的になってしまう。だがここで輸送船団を叩かなければガダルカナル島に建造中の飛行場を奪われ、日本はガダルカナル島においての制空権を完全に失う事になる。そうなれば、敵はこのガダルカナル島を拠点に反攻作戦を開始するに違いない。

指揮官にとって、これは難しい決断であつた。

「もういいッ！　ここで敵の輸送船団を叩かなければガダルカナルは敵の手に落ちてしまうッ！　司令部は旗艦を別の艦に移して撤退してくださいッ！　我々『鳥海』のみでも敵輸送船団撃滅の為に突撃しますッ！」

早川は一步も引かず、『鳥海』単艦での突撃も辞さないと叫ぶ。再突入派はそんな早川の言葉にさらに勢いを増して再突入すべしと叫ぶ。だが早期撤退派もまた負けてはいない。静かなる海において、艦橋には双方の怒号が響き渡る。

「静まれ」

飛び交う怒号の中でその声は決して大きな者ではなかった。しかし怒鳴っていた者達は全員口を閉じ、その声を発した者を無言で見詰める。

声を発したのは三川であった。三川は窓の外を見詰めたまま、部下達に背を向け続ける。鳥海はその背中が大きさに息を呑む。この周りを威圧する迫力、これこそが指揮官。三川からそんな指揮官の真髓を感じていた。

「我々の目標は敵の輸送船団の撃滅にある。だが、今ここで再突入すれば敵の空母からの反撃で艦隊は少なからずの被害を受けるだろう。これからもまだまだ続く戦争において、ここで準主力艦である重巡を多数失う訳にはいかん。今回は、夜戦での勝利を手土産に帰るのが得策だ」

そう言い、三川は静かに振り返った。雲に隠れていた月が姿を現し、窓から注ぐ月光が彼を勇ましく照らし上げていた。

「全艦、速力三〇ノットにて戦闘海域を離脱せよ」

三川の撤退命令に、艦橋から異論の声が上がる事はなかった。

三川中将の撤退命令に従い、第八艦隊は単縦陣にて速力三〇ノットという高速でソロモン海域離脱を開始した。

この撤退命令に対し古鷹や夕張が犠牲を覚悟にしても敵輸送船団撃滅の為に再突入すべしという再突入論を強く叫んだが、艦隊旗艦である鳥海は首を縦には振らなかった。

「死ぬ気になるな、死ぬ一歩手前が一番いいんだ。私達は夜戦において大戦果を挙げました。きつと、金剛さん達は誉めてくれます。今はそれでいいじゃないですか」

鳥海言葉からは、仲間を想う強い気持ちが感じられた。艦隊旗艦として皆の命を預かっている身として、仲間を失いたくはないという皆を想う気持ちが、その言葉には込められていた。

頭に包帯を巻きながらそれでも健気に微笑む鳥海の姿に、古鷹と夕張は静かに浮いていた腰を下ろした。

鳥海は他の面子も見回すが、誰一人意見や反論をする者はいなかった。それを確認し、鳥海は小さく微笑んでから表情を引き締め、宣言する。

「任務完了。第八艦隊、帰還します」

後に第一次ソロモン海戦と呼ばれたこの戦いは日本海軍伝統の夜戦となり、実施した第八艦隊の見事な大勝利で終わった。

夜間奇襲攻撃による第八艦隊の猛攻撃により、連合艦隊は重巡洋艦『キャンベラ』（自沈処分）、『ヴィンセンス』、『クインシー』、『アストリア』四隻が沈没。重巡洋艦『シカゴ』、駆逐艦『ラルフ・タルボット』が大破。駆逐艦『パターソン』中破。連合艦隊は壊滅的打撃を受けた。

一方の第八艦隊は『鳥海』が多数の不発弾を浮けて小破するに留まった。損害は軽微ながら戦果は大収穫。これほどの完全勝利はそれこそ日露戦争の日本海海戦以来であった。

この大勝利はすぐに海軍だけではなく国民にも知らされ、日本海軍の強さを改めて認識する事になった。一方の米軍はあまりの完敗っぷりに国民にこの戦闘結果を二ヶ月間伝えなかったとも言われ、日米において全く違う扱いを受ける事になった。

しかし、戦術的には大勝利でも戦略的には大敗北。これがこの第一次ソロモン海戦の評価であった。

確かに第八艦隊は見事に夜戦で敵の重巡洋艦四隻を撃沈する事に成功したが、肝心の輸送船団への攻撃は実施されず（正確には戦闘の途中で『衣笠』が遠距離から魚雷攻撃したのだが全本外れている）、主力目標であった輸送船団は無傷の状態であった。その為、ガダルカナル島に上陸する米軍兵は何の被害も受けずに上陸。その後のガダルカナル島を巡る戦いにて最大の難敵となる事になった。

もしも第八艦隊が護衛艦隊を粉砕後に輸送船団を攻撃していれば、ガダルカナル島を巡る戦いは少なからずの影響を受けていたに違いない。何せ三川中将が最も恐れていた敵機動部隊はすでに戦闘海域を離脱しており、突撃していたとしても第八艦隊の一方的な戦いになった可能性が非常に高かった。三川中将の必要以上の敵機動部隊への警戒が、第一次ソロモン海戦の完全勝利を失わせたと言っても

過言ではない。

だが所詮これは後知恵の判断に過ぎない。当時の第八艦隊は敵機動部隊が周辺海域にいと想定して行動をしていた。ならば三川中将の判断は決して間違っていた訳ではない。ただ、運が悪かったとしか言いようがない。

それよりも問題なのはこの大勝利の影にある。この戦いで探照灯を照射していた『鳥海』は敵からの集中攻撃を受けた。しかしその戦訓は考慮されなかった。これは『鳥海』が小破に留まったからというのが最大の理由だったが、実際『鳥海』は複数の砲弾を被弾するも、その大半が不発弾だったから被害が少なかった。これは当時の連合軍の砲弾に備えられた信管が不良品で誤作動を起こしやすかったから過ぎない。

この見落としが後の第三次ソロモン海戦の敗北に繋がる事となった。

第四話 第一次ソロモン海戦 後編（後書き）

これにて第一次ソロモン海戦の戦闘編は終了です。

今回は最終話。大まかな流れを言いますと重巡洋艦『加古』の沈没及び、第一次ソロモン海戦以降の話となっています。

この最終話にして、今回の短編は終了します。

あと一話ですが、どうか最後までよろしくお願いします。
それでは。

最終話 志強く書いて（前書き）

投稿遅れてすみません。あとがきのキャラ紹介で苦勞しました（苦笑）

久しぶりの艦魂短編、《艦魂年代史外伝 〱巡洋艦奮闘記 ソロモンの海に流れる血と涙〰》もいよいよ今回で最終回。

第一次ソロモン海戦を勝ち抜いた彼女達のその後のお話です。それでは、どうぞツ。

最終話 志強く貫いて

第一次ソロモン海戦を大勝利で終えた第八艦隊は速力三〇ノットの高速で撤退し、夜明けまでには無事に安全圏にまで撤退を完了した。

安全海域にまで達した第八艦隊はその場で解散となった。所属艦はそれぞれの基地に向かってここからはバラバラに帰還する事となる。

解散準備に取り掛かる第八艦隊。その旗艦である『鳥海』の甲板には第八艦隊の面々が揃っていた。

「これより第八艦隊は分隊して各基地に帰還します。第六戦隊所属『青葉』『衣笠』『加古』『古鷹』の四隻はカビエンへ。『夕張』及び『夕風』はショートランド泊地へ。『鳥海』と『天龍』は揃ってラバウル泊地へ向かいます。最後になりますが、今回の戦いは皆さんのおかげ。私達全員での勝利です。それを心に刻み、この勝利を胸にこれからも続くであろう苦闘を乗り切り、旭日旗の下での再会を祈ります。以上を諸氏らへの送り言葉とし、臨時の第八艦隊の解散を命じます。皆様、ご苦労様でした」

旗艦として最後の言葉を終えた鳥海は一礼し、それを聞いていた天龍達は拍手を送る。ここに臨時で編成された殴り込み部隊の解散が決定された。

分隊予定通り、カビエンへ向かう重巡四人、ショートランドへ向かう夕張と夕風、そしてラバウルへ向かう鳥海と天龍に別れる。

「天龍さん、鳥海の事よろしく願います」

「わかったわ。ちゃんと鳥海の面倒は見るから安心なさい」

心配そうに言う青葉の言葉に笑顔で答え、包帯を頭に巻いた鳥海の肩をそっと叩く。鳥海は「よ、よろしく願います」と緊張した様子で頭を下げ、天龍は「そう固くならなくていいわよ。気楽に行きましょう」と笑顔を咲かせる。そんな二人、特に天龍を見詰め、

呆れたようにため息するのは加古。

「はあ、軽巡に預けるのは不安要素しかないわよね」

「あんたに預けるよりは全然マシよ」

「フン、老兵は老兵らしく泊地でお茶でも飲んでるのがお似合いよ」

「……殺^やられたいのあんた？」

「フン、面白い。返り討ちにしてやるわよ」

バチバチと火花を散らし合う天龍と加古の間で、鳥海は仲裁しようにもどうすればいいかわからずあわあわと狼狽する。そんな三人の姿を見て呆れたようにため息を吐く古鷹の横で、衣笠は柔和に微笑む。

「ほんと、二人はとっても仲良しさんねえ。お姉さん妬いちゃうわあ」

「誰がこんな奴とツ！」

「あら、息もピツタリ」

くすくすとからかうように笑う衣笠の言葉に天龍と加古は顔を真っ赤にして彼女を睨み、その後互いをギロリと睨んだ後背を向け合ってそっぽを向く。そんな二人の間でやっぱり右往左往する鳥海の肩を「放っておきなさい」と苦笑しながら叩く青葉。

「じゃあ、ワシと夕風は先に行くぞ。ちいと北城を待たせておるんでな。行くぞ夕風」

「あ、はい」

そう言つて夕張は皆に別れを告げると早々に立ち去る。その後を慌てて夕風が続き、次の瞬間二人は転移の光に包まれて『鳥海』の甲板から姿を消した。そんな二人の、夕張の背を見送る天龍。その瞳には一体どんな想いが込められているのか。その表情からは察する事はできない。ただ、そんな天龍を加古は静かに見詰める。

「……バカみたい」

そうつぶやくように言い残すと、加古は一人で去る。そんな彼女の背中を衣笠が静かに見送る。

「加古ちゃん……」

彼女の名をつぶやいた瞬間、加古は転移の光に包まれて消えた。

午前八時頃、第八艦隊所属艦はそれぞれの基地に向けて解散した。予定通り、第六戦隊の重巡洋艦『青葉』『衣笠』『加古』『古鷹』の四隻はカビエンへ。軽巡洋艦『夕張』及び駆逐艦『夕風』はショートランド泊地へ。重巡洋艦『鳥海』及び軽巡洋艦『天龍』はラバウル泊地へ。

第一次ソロモン海戦での激闘を制した八隻はそれぞれの目的地に向けて艦首を変針する。それぞれの艦魂達は大勝利を共にした仲間達との別れの為に自艦の艦尾に立って散っていく仲間達に手や帽を振る。

こうして、奇跡の大勝利を収めた第八艦隊は解散した。

そしてこれが、彼女の永遠の別れとなった……

翌朝、第六戦隊は順調に夜通し進み続けカビエン近くのニューアイランド島北方海域に達していた。

輪型陣形で航行する第六戦隊。空には近くの基地から発進した対潜哨戒機が一機艦隊前路哨戒の為に先行しており、すでにここが味方の制空圏内である事を示していた。

第六戦隊旗艦『青葉』を中心に、『加古』は『青葉』の右舷後部から続くように走っていた。

第二主砲の上に椅子を置いて優雅に座り、朝風に長く艶やかな黒髪を流し、朝日の光で煌くメガネをクイツと上げ、南海の美しいエメラルドグリーンの海を見詰めるのは加古。すると加古は「ふわぁ……」とあくびをする。

「……さすがに眠いわね。基地に戻ったらこれでもかってくらい情^だ眠^{みんむさぼ}を貪りまくってるわ」

そつつぶやき、瞳の縁に微量に溜まった涙を指で拭う。その顔には少なからず疲労の色が見える。激しい夜戦の後、敵潜水艦を警戒

して一睡もしていないのだ。実質二日間の徹夜となると、さすがの加古でも辛い。姉の古鷹は全くそんな様子も見せなかったが、あれは実の妹が認めるある意味化け物的な軍人なので比較対象にはならない。そういう意味では衣笠も同じであり、ある意味この戦隊で自分に最も近いのは青葉なのかもしれない。そんな事を思いながら再び出たあくびに口をむにやむにやさせる。そろそろ本気で眠気が危険域に突入しそうであった。

「軽く仮眠でもした方がいいわね……」

もう一度あくびをして自分の部屋に戻ろうと踵を返す。その時何気なく海に視線を向け、そして見た。自分に向かつて水面下を猛烈な勢いで突っ込んでくる四本の槍　魚雷であった。

「てッ、敵潜水か　」

気づいたのが遅過ぎた。すでに魚雷は艦の目前にまで達しており、加古が言い終わる前に四本のうち三本の魚雷が『加古』の右舷艦首、艦中央部、艦尾にそれぞれ命中。『加古』の右舷で三本の水柱が立ち上った。

「がはあッ!？」

魚雷が命中した瞬間、加古は右側頭部、右脇腹、右膝がそれぞれ裂けて血を噴き出す。激痛に悶え、加古はそのまま床に倒れてもがき苦しむ。あつという間に彼女の周りは彼女自身の真っ赤な血の海となった。

「ゴホッ！　ゲホッ！」

激しく咳き込むと、口から大量の血が吐き出された。どうやら内部にも深刻なダメージを受けたらしい。その血を見て、加古は自身の傷の深さと、逃れられない死を悟った。

「……チッ、この私が、こんな所で……ゲホゲホッ！」

咳き込むたびに血が溢れ、自身をさらに真っ赤に染め上げる。傷口からは止まる事なく血が溢れ続け、抉られた肉は見るに堪えない。微かに見える白いものは、もしかしたら骨かもしれない。

起き上がる力もなく、血の海に倒れる加古。

三本の魚雷を受けた『加古』は一瞬で航行不能となった。それどころか破口から大量の海水が艦内部に入り込み、急速に右舷へと傾斜。わずかな間に、『加古』は沈没確定の状況となった。艦長の高橋雄次大佐はすぐに退艦命令を下し、兵達は急いで『加古』から脱出していく。その光景を見て、加古は「薄情な連中ね……」と苦笑しながら悪態づく。

不気味に横へ流れる空を見上げながら、加古はいつの間にかヒビの入ったメガネをクイツと上げる。

「加古ッ！」

その声に視線を向けると、そこには実の姉である古鷹に衣笠、青葉の姿があった。古鷹と衣笠は加古の見るも無残な姿に言葉を失い、青葉はその痛々し過ぎる姿に目を逸らす。自分ではよくわからないが、自分は相当ひどい姿なのだと想像できた。

「……私を……見送りに来て……くれたのかしら……？ それに……しては……いふんと……貧相な面子……よね。まあ……私にはお似合い……だけど……」

「バカ者ッ！ それ以上しゃべるなッ！ 無駄に体力を使うぞッ！」
自分を抱き上げて声を震わせながら叫ぶ姉の言葉に、加古は苦笑を浮かべる。

「……いいのよ……どうせ、助からないって……わかってるから……」

「加古……」

自分の腕の中で血に塗れ、ぐったりとしている妹の姿に古鷹は悔しげに血が滲み出る程に唇を強く噛み、凜と鋭い双眸から涙を零す。そんな姉の姿に、加古は小さく笑った。

「……あゝあ、総帥なんて……呼ばれてる姉さんが……涙なんて似合わない……わよ……」

「黙れ。自分でも似合わない事くらい重々承知の上だ……だが、溢れて止まらないんだ」

「……そっか……姉さん、世話になったわね……かわいくない妹で

「がっかり……しただろうけど」

自虐的に言う加古の言葉に、古鷹は力強く首を横に振った。

「そんな事はない。私にとって、お前はたった一人の大切な妹だ。かわいくて、愛らしくて、可憐で、最高の妹だ」

「……今の誉め言葉……私には最初の一文字すらも……似合わないんじゃない？」

そう言いながらも、加古は嬉しかった。誰だって、実の姉にそうやって誉められれば嬉しくないはずがない。それも、ずっと憧れていた大好きな姉相手なら尚更だ。自分と違って人望に溢れ、指揮官の代名詞のような姉の背中にもいつも憧れを感じ、追い掛けていたあの頃が懐かしい。

「加古ちゃん……」

瞳の縁に涙を溜め、悲しそうな表情を浮かべたまま自分を見詰めている衣笠の姿に、加古は小さく苦笑を浮かべてため息を零す。

「あんた……最後まで私を年下扱いね……まあ、もういいけどさ……」

「だって、お姉さんはみんなのお姉さんだから……」

「意味わかんないわよ……」

衣笠の狼狽のあまりの意味不明な言葉に苦笑しつつも、こんな時でも変わらない衣笠らしい衣笠の姿に少しか救われた気がした。そして、先程から嗚咽を漏らしながら泣いている青葉を見て、小さく微笑む。

「青葉……あんたも……十分古参の艦魂なんだから……もつとしっかり……しなさいよ……」

「ご、ごめんなさい……」

「別に……謝られても……困るんだけど　衣笠。ダメダメな姉の面倒は……あんたがちゃんと……看なさいよ」

「ええ……」

仲間一人一人に声を掛けた後、加古は再び姉の古鷹を見詰める。妹の真っ直ぐな瞳に対し、古鷹もまた一歩も引く事なくそれを正面

から受け入れる。

「姉さん……ちょっと、伝言を頼まれて……くれないかしら……」

「ああ、わかった。何だ？」

そして、加古は自分を優しく抱き止める姉の耳にそつと最期の言葉を残した……

被雷から五分後、重巡洋艦『加古』は沈没した。三本の魚雷の直撃を受けたからとはいえ、あまりにも急な沈没であつた。しかし高橋艦長の迅速な退艦命令の甲斐あつて、犠牲者の数はわずかであつた。

わずか五分で海底に没した『加古』。その黒鉄の艦が浮いていた海を、三隻の僚艦の甲板の上から多くの兵が見詰めていた。これまでもずつと共に第六戦隊を形成していた『加古』の沈没。兵達のシヨツクも大きい。

そして、その中に残された三隻もいた。^{さん}海底に没した妹、仲間に向かつて、三人は涙を堪えながら凜々しく敬礼し、彼女の冥福を祈つた……

それから数カ月の月日が流れた……

第一次ソロモン海戦での第八艦隊の大勝利の負の遺産、潰しそびれた敵上陸部隊の攻撃でガダルカナル島は完全に敵の手に落ち、制海空権もまた連合軍の手に落ちてしまつていた。

日本海軍は連日奪われたガダルカナル島奪還の為に空と海で連合軍との激しい戦いの日々が続けている。完全な消耗戦となつてしまつた泥沼のソロモン戦。日本海軍は次第に息切れ始める。

制海空権を敵に奪われたガダルカナル島近海。日本軍は何としてモガダルカナル島奪還の為に増援の上陸部隊を派遣するもその輸送途中に悉く撃破され、現在では大規模な輸送船団による輸送ではなく、駆逐艦などの高速小型艦による夜間輸送、俗に言う《鼠輸送^{ねずみ}》》を続けていた。しかし、この方法も次第に敵のレーダー網が完璧に

なっていくと失敗しやすくなり、結果的にソロモンの海に多くの駆逐艦が沈む事になった。

そして、鼠輸送を担当したのはニューギニア・ソロモン諸島を担当する第八艦隊であった。

今日もまた夕暮れの中、鼠輸送の為にショートランド泊地で待機していた駆逐艦数隻が慌しく出港の準備を整えている。輸送担当の艦は予備魚雷や必要最低限の弾薬だけを積み、余った場所に補給物資を押し込む。この輸送船一隻にも満たない物資が、今もなお飢餓で苦しむガダルカナル島の味方の貴重な生命線になると思うと、戦況はどれだけ劣悪か安易に想像ができる。

出港準備を整える駆逐艦を、碇を下ろして停泊している軽巡『天龍』の甲板から天龍が静かに見詰めていた。

第一次ソロモン海戦でのあの大勝利は、今ではむしろ丸裸だった敵輸送船団を叩かなかったと批難の対象へと変貌していた。勝った時はあれだけ持ち上げておいて、いざ戦局が悪くなれば一転して批難。人間と言うのは浅はかだ。否、艦魂もまた同じだ。そう結論すると、自嘲的な笑みが彼女の口元に浮かぶ。

「そういえば、加古も自分も当事者だった大勝利なのに、あんまり喜んでなかったわね。あいつも、こんな結末を予感してたのかしら。そうだったら、悔しいけど、叶わないなあ」

苦笑しながら天龍は茜色に染まる空を見上げ、もういない小憎たらしい後輩を思い出す。

あの戦いの後、自分達と別れた第六戦隊はカビエンへ帰還する途中で敵潜水艦の魚雷攻撃を受け、そして加古が死んだ。三本の魚雷を受け、わずか五分で沈没したそうだ。あの畳の上では死にそうもない悪女にしては、あまりにもあつけないくらいの死に様だ。

第六戦隊の面々は加古を失った事で一致団結してあれから連合軍を叩き潰すいつも豪語している。あの優しかった青葉も、戦いを嫌っていた衣笠さえも、加古の敵討ちを胸に誓っている。憎しみが

憎しみを呼び、新たな憎しみが生まれる。戦争はその最終形態だ。第六戦隊の面々と違って、自分は昔から加古とは反りが合わなかった。例えそれが確執のあった軽重それぞれの巡洋艦共通の敵役としての演技だったとしても、あいつの瞳は心から自分とは水と油、決して交わる事はないとわかっていた。

決して一緒にはならず、常に互いを意識して強くなる　皮肉にも、加古は天龍にとって掛け替えのないライバルだったのかもしれない。

そして、ライバルだからこそ、自分の中にある葛藤にも気づいていたのだらう。だから、あいつは最期に自分に言葉を残した。

行動して後悔するより、行動しないで後悔する方がずっと愚行よ。あんたはバカなんだから、難しい事は全て捨てて、バカみたいに真っ直ぐ走ってればいいのよ

それが、加古が最期に姉の古鷹に預けた自分への言葉であった。実に彼女らしい小憎たらしい台詞で　彼女らしい最高のアドバイスであった。

あれから自分はその言葉を何度も頭の中で反芻し、アドバイスとして着々と心の準備を進めていた。そして今日、それを実行する日が来たのだ。

「おお、おったおった」

その声に振り返ると、茜色に染まる甲板をお下げとアホ毛を揺らしながらこちらへ走って来る夕張の姿があった。彼女の姿を見た途端、天龍の顔に緊張が走る。

緊張した面持ちとなった天龍に対し、夕張は常と変わらない。走って来た事で乱れた息を整え、ニツと健康的な歯を見せて一切の警戒心のない、親友に向ける無邪気に笑顔で対峙する。

「何じゃ天龍。ワシをこんな所に呼びつけて、一体何の用じゃ？」

夕張は思い当たる点がないのだろう。全く予想もできず、困惑したように首を傾げている。そんな自分を信頼し切った親友に対し、天龍は胸を痛めた。決して罪悪感がない訳ではない。むしろその気持ちは非常に強い。でも、それ以上に、もう自分に嘘はつきたくなかった。

行動して後悔するより、行動しないで後悔する方がずっと愚行よ。あんたはバカなんだから、難しい事は全て捨てて、バカみたいになっ直ぐ走ってればいいのよ

頭の中で、ムカつくライバルの最期の言葉が響く。実際に彼女自身から聞いた訳ではないのに、頭の中で響くのはまさに彼女の声であった。あの人の神経を逆なでするような物言いでありつつも、本当は相手を想う気持ちに溢れた、あの聴き慣れた声。

「天龍……？」

「……夕張、私はあんたに謝らなくちゃいけない。だから、最初に謝っておくわ、ごめんなさい」

そう前置きし、天龍は静かに頭を下げた。この彼女の突然の行動に驚いたのはもちろん対面している夕張だ。いきなり友人が頭を下げてきたのだから、驚くのは当然だ。

「な、何じゃいきなり藪から棒に。ワシはお主から謝られるような理由は一切思い当たらんぞ」

「そりゃそうよ。だって、私がずっと自分の中に封印し続けて来た事なんだから」

「お主の中、じゃと？」

まるでわからないと夕張は仕切りに小首を傾げている。そんな親友の姿をしつかりと瞳に映し、天龍は一度深呼吸をしてから言葉を続ける。

「あんた、北城の事が好きなんですよ？」

「なあッ!？」

天龍の容赦のない単刀直入に対し夕張は顔を真っ赤にして驚く。夕焼けに赤く染まっただけでも、人目でわかるくらいに彼女は赤面し

ていた。

「な、何を言うておるかッ！ わ、ワシは別に北城に対してそのような感情は抱いておらんぞッ！」

顔を真っ赤にしたまま必死に否定するが、それでは全く説得力がない。それ以前に、天龍はこれまでの積み重ねから推測ではなく確信として質問している。夕張は、北城の事が好きなのだ。

「この期に及んでまだ白を切るつもりなのね……」

「じゃから、違うと言うておろうがッ！ 白を切るとは何じゃッ！？」

顔を真っ赤にして怒鳴る夕張だが、明らかに動揺している。もはや隠しようがない事実、天龍はそんな不器用な親友の姿に一瞬だけ口元を緩め、そして再び引き締める。

「じゃあ、私が北城をもらっても、一向に構わないって事よね」

「え……」

今までの興奮がウソのように消え、呆然とその場に立ち尽くす夕張。その表情は天龍の言葉の意味が理解できずどんなリアクションをすれば良いのか判断できないらしい。だが、その瞳だけは天龍の言葉の意味を理解していた。理解はしてはいるが、それを拒んでいる。

「な、何を言うておるんじゃ、お主は……？」

少しの間を置いて、夕張が搾り出したその声は震えていた。すでに頭が状況のほぼ全てを理解したらしく、でも心はその理解を拒絶している。そんな状態だ。だからこそ、震えるその声には、違っている欲しいという彼女の強い願いが込められている。

だが、天龍は決して首を横には振らなかった。もう、これ以上親友の前で嘘をつき続ける自信も覚悟もない。何より、もう心が堪えられなかった。

スウと息を吸い込み、呆然としている親友の目をしっかりと見詰めて、天龍は夕日を背後にしながら静かに、決して口には出さないと決めていたその想いを解き放つ。

「私も、北城が好きなのよ……」

茜色に染まる海に、さざ波の音がゆっくりと時を刻むように響き渡る……

最終話 志強く貫いて（後書き）

《天龍》 てんりゅう

天龍型軽巡洋艦一番艦 軽巡洋艦『天龍』

出身 横須賀海軍工廠（神奈川県）

身長 162cm

髪型 ポニーテール

実年齢（1942年8月現在） 22歳

外見年齢 17、18歳

誕生日 11月20日

家族構成 妹・龍田たつた

今作の中心的キャラの一人。曲がった事が大嫌いな直進的な性格をした最古参の軽巡洋艦艦魂。今作には未登場だが龍田という妹がおり、姉妹で夕張とは親友という関係を築いている。武士道を重んじており、若い頃の古鷹の世話をした事があり巡洋艦の総帥とまで呼ばれる彼女も天龍には逆らえない。最古参、旧式という単語をひどく嫌っており、それを言われると激しく怒る。しかしもはや今の時代に自分は旧式だという事は自覚している。実は夕張が片思いをしている北城に自身も片思いしていたが、親友の為にその気持ちを隠して譲っていた。しかし加古の最期の言葉で決心し、夕張に恋敵宣言をする。この年の終わり、潜水艦の魚雷攻撃で命を落とす。

《夕張》 ゆうちやう

夕張型軽巡洋艦一番艦 軽巡洋艦『夕張』

出身 佐世保海軍工廠（長崎県）

身長 160cm

髪型 セミロング+おさげ+アホ毛

実年齢（1942年8月現在） 19歳

外見年齢 16、17歳

誕生日 7月31日

家族構成 なし

今作のメインキャラの一人。実験的に小型の艦に重武装を施し、世界海軍を驚かせた軽巡洋艦『夕張』の艦魂。軽巡洋艦の中では中堅的な立ち居地だが、海軍全体では十分古参組に入る。語尾に「じや」をついたり一人称がワシであったり、何かと爺臭い。天龍に負けず劣らずな直進的な性格で、彼女もまた武士道を重んじている。何かと問題が起きやすい巡洋艦界のブレーキ役として苦勞も多い。自分に乗っている北城に片思いを寄せているが、本人はそれを否定している。親友の天龍もまた北城が好きだという宣言に対し、言葉を失って驚く。後に天龍を追うように敵潜水艦の魚雷攻撃を受けて命を落とす。

《^{かこ}加古》

古鷹型重巡洋艦二番艦 重巡洋艦『加古』

出身 川崎重工業神戸造船所（兵庫県）

身長 165cm

髪型 長髪

実年齢（1942年8月現在） 16歳

外見年齢 17、18歳

誕生日 7月20日

家族構成 姉・古鷹^{ふるたか}

本作のメインキャラの一人。重巡洋艦界の次席古参にして、重巡洋艦派閥の参謀長を務める艦魂。徹底した反軽主義者で何かと最新の駆逐艦に性能が劣る旧式軽巡洋艦を雑魚扱いし、海軍のお荷物とまで呼ぶ始末。軽巡洋艦と重巡洋艦の関係が良好ではないのは彼女の存在が大きい。しかし本当はそれぞれの前身である装甲巡洋艦と防護巡洋艦との間にあった激しい対立を新世代の巡洋艦に起こさないように共通の敵（自分）を作る事で目的も意義も違う巡洋艦同士の関係を保っていた。一見すると嫌な奴だが、本当はとても仲間想い

な子。昔から天龍とは何かと対立が多かったが、良きライバルだとも思っていた。最期の時にも、天龍に自分の幸せを願うよう助言してこの世を去った。

《古鷹》
ちゅうかい

高雄型重巡洋艦四番艦 重巡洋艦『鳥海』

出身 三菱重工業長崎造船所（兵庫県）

身長 152cm

髪型 ボブカット

実年齢（1942年8月現在） 10歳

外見年齢 14、15歳

誕生日 6月30日

家族構成 姉・愛宕^{あたご}・高雄^{たかあ}・摩耶^{まや}

今作で二人しかいない本編出身者。本編では目立った活躍もなかったが、今回は旗艦として難しい判断を迫られる場面が多々ある。今回登場するの第八艦隊艦魂の中で最も若い、というか幼い。しかし愛宕からの言葉を信じ、旗艦を全う。闇夜で危険な探照灯を照射し続け、身を挺して部下の為に先頭を走り続けた。姉達や古鷹達のような立派な指揮官になるのが夢。その為に努力を惜しまず、手に入れた情報や教えは逃すまいと常にメモを携帯しているメモっ子。後にレイテ沖海戦に出陣して命を落とす。

《古鷹》
ふるたか

古鷹型重巡洋艦一番艦 重巡洋艦『古鷹』

出身 川崎重工業神戸造船所（兵庫県）

身長 170cm

髪型 ポニーテール

実年齢（1942年8月現在） 16歳

外見年齢 19、20歳

誕生日 3月31日

家族構成 妹・加古^{かし}

重巡洋艦最古参の艦魂にして、敬意を込めて巡洋艦などからは《総帥》、駆逐艦達からは《提督》と呼ばれている鬼の前線指揮官。難しい事が大嫌いで常に見敵必殺精神で真っ直ぐに敵に突っ込んでいく性格をしている。最古参の戦艦にして連合艦隊現役最古参の軍艦、戦艦『金剛』の艦魂とは旧友であり共に日本の為に力の限り戦い、散ろつと決めている。金剛以上に武士道を重んじる、連合艦隊最強の侍。しかし後に大和魂を掲げた彼女は連合軍のレーダーの前に敗北し、その最初の犠牲者となった。

《衣笠》^{きぬがさ}

青葉型重巡洋艦二番艦 重巡洋艦『衣笠』

出身 川崎重工業神戸造船所（兵庫県）

身長 168cm

髪型 長髪

実年齢（1942年8月現在） 14歳

外見年齢 20、21歳

誕生日 9月30日

家族構成 姉・青葉^{あおば}

巡洋艦界のお姉さん。おっとりとした性格で常にほんわかした雰囲気と優しい笑みを浮かべている女性。一人称を《お姉さん》と言い、間延びした話し方とする。その優しさや包容力から巡洋艦、駆逐艦などからはみんなのお姉さんの存在として親しまれている。しかし実は戦艦『長門』の艦魂と同じくキレ者であり、彼女が巡洋艦界の真の総大将と言う者もいる。何かにつけて女の子を抱き締めたりとちょっとエッチな事をしたりと、ちょっと危険人物。皆からは百合扱いされているが、本人曰く「かわいいものなら男の子でも女の子でも大歓迎」であり、「一応男の人が好きよ」と言っているが信憑性が低い。姉の青葉の前では一人称はややこしいので《私》となり、姉のはずの青葉をまるで妹のように溺愛している。後に、仲

間を守る為に身を挺した戦いを行い命を落とす。

《青葉》 あおは

青葉型重巡洋艦 一番艦 重巡洋艦『青葉』

出身 三菱重工業長崎造船所（長崎県）

身長 158cm

髪型 長髪を先端で結っている

実年齢（1942年8月現在） 14歳

外見年齢 15、16歳

誕生日 9月20日

家族構成 妹・衣笠
きぬがさ

今作では二人しかいない本編にも登場したキャラ。しかし本編ではチヨイ役であり、今作でも控えめな登場。個性的な面々が多い中、普通な子。妹の衣笠に完全に妹扱いされているが、彼女自身が衣笠を姉のように想っており、彼女に溺愛されている事を喜んでいる。幾多の戦いを傷つきながらも生き続け、大怪我を負った状態ながらも終戦まで生き残った。だがその頃には見も心もボロボロになり、喜怒哀楽を失った人形のような状態になっていた。

どうも あれ？ 何だか変だった？

ああ、はい。いつもならあとがきはキャラを交えてのやり取りをやるんですけどね。実はあのあとがきが一番苦労するんですよ。ついでに、自分のキャラじゃないので疲れる……

なので今回は普通にお送りします。あ、キャラ紹介に夕風と北城がないのは、詳しい設定なんてほとんどないチヨイ役だったので省略しました（北城は今回唯一の人間キャラなのに）。

わずかな間でしたが、短編最後までお付き合いくださりありがとうございます。ございました。

何だか今回の作品の終わり方は続編がありそうな感じですが、現在の所その予定はありません。それどころか現在の艦魂予定すらもまだ考えてはいませんが、またこうして短編などを出して皆さんとお会いできる事を願っています。

それでは皆さん、改めましてありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2598n/>

艦魂年代史外伝 ～巡洋艦奮闘記 ソロモンの海に流れる血と涙～

2010年10月8日10時58分発行